古史傳

自第四段
至第六段

二

歴史部
第一六號
二函
共六冊

和書門
類 四二五一八號
函 一三一
架 一一
冊 四〇

内閣文庫
和書
類 四二五一八號
冊 四
函 一四〇
架 一六

内閣文庫
番號 和 42518
冊數 40 (5)
函號 140 185

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker x-rite MSCCPPCC1214
MSCCPPE1214 x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

平篤胤謹撰　男　鐵胤
孫　延胤　續攷

神代上二上卷

次國地稚在土時。成坐神土御名。宇比地邇神。次妹須比智邇神。次妹沙土根神。次角機神。次

妹活機神。次大斗能地神。次妹大斗乃辨神。示云大富道神。次妹大富邊神。次淤母陀琉神。次妹訶志古泥神。示云吾屋惶根神。示云吾屋橿城神。示云青橿城根神。示云吾忌橿城神。次伊邪那岐神。次妹伊邪那美神。

上件自国出底立神以下。伊邪那岐伊邪那美神以上。幷稱神世七代。上二柱者。獨神各云一代。次雙坐十神者。各

合二神而云一代也。

（アハセフタバレラヲテマヲスヒトヨト）

次は。国地稚在之時と云文を隔て〜。成坐神と云ふ係ゐ
おと上ふ同じ。○国地稚在之時。国地とは。かの其狀難言
かゐし一物の。混成きる中をゐ。天も萌上ゐ。根国も垂下
りし其跡ふ残きほ物を云。それ後ふ締め固まりて。即此
大地と成れるを。其未固はらぬ在しをどを稚在之時と
は云ゐ。神代紀一書ふ。古国稚地稚之時云〜とある伊志
を。忌部正通口訣ふ。宇比志ゐめと解とゐ。此説をく當れ
ゐ。宇比を切むきむ。伊とゐきむ。舊くも国稚地稚と訓け
むを。訛りて。クニイシツチイシノ時とはゐれるゐる

ばし。然るを記傳ふ。此訓を非ゐりとて。彼記ふも国稚と
ある稚を。和訓久と訓れしも叶もば。此も初宇の意ふ通
もして書來ゐるを見えさり。事物の未成ゐ整もぢるを。
其も下ふ注ふを見て知べし。
初くし外ぞも常ふも云ふゐ。○宇比地邇神。次妹須比智
邇神。亦云。埴土根神。次妹沙土根神。宇比地も。初泥の義ふ
ゐ。然るを宇比地と云も。同音も重れるは。言ゲはく〜ふ切
めて。其を一ゐふ言習へる古言の格ふり。此神の御名ふ
依て。国稚地稚の訓を知ばく。国稚地稚も文ふ依て。此神
も御名の義を曉るばし。神代紀ふ。此名を埴土と書て。此ヲ
ふ。泥を宇伎と云ほとも有。ふ云于毘尼と見え。後世の哥ふど
どふ依て。他義を思ふばらら。彼残ゐ止めて。国地と成
ばき物も稚くしく。稍泥の象も成出る程ふ生坐る

故ふ如此御名ふ負坐るふや。（塑のことは既ふ第二段ふ云ゆ）須比智とは砂泥の義ゐて彼稚しき物ふや〳〵泥の象を成せるゞ中ふまさ砂泥の形も清ア成まるをゆ負坐る御名ふ依ばし。（神代紀ふ此名を沙土と書て此云須毘尼とある沙字を字書ふ砂と同義の字ゐて和名抄ふ邑類云砂水中細礫也和名須奈古とあり須奈古の須を須比智の須と同じまさ砂字を字書ふ水旁之地と注せる義を思ふべゝら安さるハ此時いまゞ水旁之地と云ざゝりゆれ地を成らざアしゝゞあゆ然も云ゐべき処の成れるを淤能碁呂島ぞ始めふる邇を根と通ひて稱辭ふア。（根といふ称辞の義を次ふる惶根神の処ゐ注ふを見べし）次妹とは師云此をア五世の神等は各女男雙坐れども男神を先ざち女神はや〳〵後れて生坐る故ふ次ぞ云ふゆ妹を伊毛と訓べし。（和名抄ふ伊毛宇止とあるを妹人の義ふて）

後のことふア伊毛とは古夫婦ふまれ兄弟ふまれ他人ぞちふまれ男と女ぞ雙ぶと知ふ其女を指て云稱ふア。（故ゐ古事記の例兄弟を挙るふ兄と妹ふれゞ妹を妹某といひ姉と妹ふれゞ弟某と云て妹とはいはゞ阿遲鉏高日子根神次妹高比賣命ぞいひ姉石長比賣其弟木花之佐久夜毘賣と云るゞ如し心を著べし古の定まりと見えゞり然れゞ女と女ぞの間ゐてを伊毛と云こをを上古ふを無アしふアまさ仁賢天皇紀ふ古者不言兄弟長幼女以男称兄男以女称妹とある如く男をゆを姉をを妹と云しふアさて又夫婦の間ふて妻を妹と云ることを世人もを〳〵知れることふゆ然るを書紀ふ雄略天皇の皇后を指て吾妹と詔るを註して称妻為妹蓋古之俗乎とあるをいゐゐぞや此を今京ふおゆてまでも常ふ云ることふて奈良のころはさらふるを如此をそ〳〵あげふ蓋古之俗乎ふゞ〳〵を強て万を漢籍免ゐさむとての文ふゆちて又他人ぞちの間ふても男の女を指て妹と云ることも万葉ふゞふ甚多し但し十二巻ふ妹ぞい言ゞ言ふ伊るゐも例しかし然安ゞふかけまく欲き言ふ伊るゐも

とを免るを思ひて。敬ふばき人をば云ざと云ひ称てこそ。然るをや〜後りは。女どち此間ふても稱ふやう〜ふれと。姉妹の間ふて。妹を云む。さらふ。他人りても万葉四吹黄刀自が哥。まさ紀女郎が友ふ贈哥。まさ十九り。家持の妹の。其妻に許ふ贈哥。その答哥ふどふ皆妹といひて。さて妹字をしも書ハ。此稱り正しく當れる字のふに故り。姑兄弟の間に伊毛ふ就て當さふものふと。也此字ふ泥みて。言に本義を勿誤と。然るを後世人む。ひさふ故ふ。伊毛と云む。本兄弟の妹をと出さる。ひら字を主として思が轉ゆて。妻をも然云ぞと心得誤る也ゆ。也云きさふはことふ然る説ふと。但し妹字ふ就て云れさる説む信ごのあし。ちゆは此妹字は。常ふ姉妹といひて。專と女弟に事ふ用ふきども。其む末のこと也れゆ。本は彼易に雷澤

歸妹ふどの義を思ふふ。少女に嫁せむと云る意ふと。此等ふ依て。古く伊毛と云ふ。此字を用ひらきあふものふるぢし。然れど誤と也は云ぢらひ。ふむ猶とふ委く考記せるもの有り。師云。さて是をり淤母陀琉訶志古泥神までむ。さて女男雙坐るを以て。女神をば妹と申にふと。嫁の事む。未始まらざふ時ふれど。妻の謂ふは非ず。○角機神。活機神。師云。角む都怒と訓ぢし。古へむ凡て都奴と云しふと。上の豊雲野の。野に訓の下ふ云へるゞ如し。角臣を古事記ふ。都奴臣と作るふぎを以知ぢし。其餘も皆然り。ちて御名意。凡て物のと拔りふ生初て。あと牙ば尾頭手足ふどの分ちむ。未生ざる形を都奴と云。獸の角も此意ふて。其形を以

て云名あ織を借字おて。久比を上れ豊雲野の下ゐ云へる
るべし。織如く。彼久毛まさ久年。久美許理ゐ皆通ひて。物の初
て芽し生意の言れ。まさ物の集り凝る意をも兼さ。
れば。おのゐらら芽具牟涙具牟ゐどれ具牟ゐ同じ。具牟を具
意は一ッ通へ。芽具牟涙具牟ゐどれ具牟ゐ同じ。
美とも活用。活とは生活動き初る由ゐ。と言れしゐ依
く言ゐ。
て按ふ。角具比活具比とは。かれ初土砂土の稍固まる
ぼき芽を含さるゐどゐ。成坐る義をもて。其時れ趣と。成
坐ゐ神の御身れ成れる状とを兼て。負せ奉れる御名ゐ
るべし。記傳ゐ。角織神を。角凝魂命ゐるべしと云ひ。活織
神を。神祇官坐御巫祭八神中れ。生産霊神ゐるべ
しと云れ。まさ姓氏録ゐ見えさる伊久魂命の魂を。牟須
毘を訓て。同神の由ゐ云れゐ。ゐ説をあらば。角凝魂命の

ことを既ゐいひ。生産霊神のゐとを。神武天皇巻ゐ。八神
を祭ゐ給ふ処ゐ。委く註ふを見べし。まさ伊久魂命のこ
を。第九段の傳ふを見べし。○大斗能地神。大斗乃辨神。男神れ方の
ふ註ふを見べし。大を。意富と
作ゐし。女神の大ゐ例ひ。神代紀ゐも。大戸
之道。大戸之辺とあるゐ依ゆて。改免記せゐ。師云。大は稱
辭ゐ。斗ハ處ゐ。凡て處を斗と云例多し。祓處立處伏
處寝處ゐどれ如し。方葉陸奥哥ゐ。祢度と石ゆ。弘仁私記
序ゐ。古語謂居住為止をあるも。処の
意をゆ
出さ。能を之てふ辭ゐ。地を上ゐ出さる比古遲れ遲
ふ同じ。辨は男神の地ゐ對て。女を尊む稱ゐ。老女を云
も尊むを出さゐふる法し。百師木伊呂辨。八坂振天某
はさ級長戸邊荒河刀辨。苅幡刀辨ゐど云刀辨の辨も同
辨ゐど云名の辨も是ゐゆ。
じ。此外も某刀辨
といふ名多し。まさ其刀辨を賣ゐ通を。して。度賣と母

云ひ。春日建国勝戸賣沙本大闇見戸賣。志理都紀斗賣あ
ぞなり。今云。此中ふ伊斯許理度賣をも挙て。同意ふ解れ
されど。彼度賣も異意あれど註し出ば。其由も第
四十六段の傳よ
いふを見るべし。かゝきバ此二柱の御名も。彼地と成ば
き物の凝成て。国處の成れる由ふて。其ふ女男ハ尊稱を
附さるれ。今云。大斗とし申ハ由も。教子ふる六人部
是香ゞ。今一ッの考ふもあ。其も第六段。美斗
能麻具波比の
処ゝ注ふべし。ちて大富道大富邊と申は。大戸能地大戸
乃辨と申ハ御名の轉れる稱ふて。異ふる意ふし。まさ思
ふよ。富
は処の借字よて。大富道辺と訓べきよ
や。富を斗とのみ云と。富樫ふぞの類ふ。○淤母陀琉
神。師云神代紀ふ。面足尊と書れと。此字ハ意の御名ふ
。万葉二ゝ。天地日月與共滿將行神乃御面跡云ゝ。九ゝ

望月之滿有面輪二云ゝとなり。此二の滿字今本の訓も
誤れるを。師ハ冠辞考よ。
此面足ふ神名の例を引て。多
理。多礼流と訓れ多るぞそ。
面の足と云は。不足處ふ
ゝ具ハ。ハ字ふを云。面を云て手足其餘も。皆凡て滿
足るふとはふもれる御名ふ。今云。ふ此ゝ神祇官坐
御巫祭八神中ハ。足産日
神と申ハ此神ふ。
思ひ誤られさる説ふれず。とて言れし説ども。其も
八神を祭給ふ処ふ採らば。其由も神武天皇卷ふ。
ふ注ふ多見べし。○訶志古泥神。亦云吾屋惶根神。師云。訶
志古は。古書よ。畏可畏。恐惶懼ふどハ字を書て。おそ
意ふ。畏志。畏伎と活用きて。其伎も加伎久祁と活く言
ふり。まさ賢をも智るをも云も。然る人も畏る
ばき故ゝ。轉ゆ
ていふれ。吾屋は元とり借字ふて。阿夜とは驚て歎
聲ふゆ。皇極天皇紀ふ。咄嗟を夜阿とも阿夜ゞも訓。今本

ふた。咄を吐ふ誤れア。凡そ阿夜。阿波礼。波夜。阿くふどみふ本は同く歎。芦ふて。少し於の異あるふア。抑歎くや
た。中昔ちア。してた。多く悲み愁ふは事ふのみ云へども。
然りた非ず。那宜伎は長息の約まア。ある言ふて。凡て何
事ふまれ。心り深く思た。事あれば。長き息をおく。是
即。那宜伎ふゆ。されば喜ア。とよも何ふも。歎はいるこ
とふア。さて其。歎きた。阿夜や。阿波礼と。はと阿夜と言
も。波夜とも芦の出れば。歎。芦とたいふゆ。
て歎くばき事を。阿夜爾云くとも云ア。阿夜ふかしふし。
ふ悲しふぞ。阿夜ふ恋し。阿夜
の類れア。はと奇し。危し。れや母。歎きて阿夜と云ふ。
ちゆ出ある言ふア。まある阿那も阿夜と通へア。阿那ある ふ
ひしふどの阿那ふゆ。應神天皇紀り。穴織とたるを。雄略 と。阿那こ
天皇紀りは。漢織とたるア。ふき阿夜。阿那同じき證ふゆ。
阿那可畏た。阿夜可畏と。全同じ。阿夜ふ可畏しと云ア。ア。
夜可畏と云た。其可畏きふ。觸て。直 も。猶やるやうふた。阿
ふ歎く言ふれば。いちく切ふゆ。
泥た。男をも女ア。も尊

む稱ふア。其た名兄の約アある言ふ。ばし。兄た女男ふ
ア。同く兄。字を書。ども。勢と云。た。 れさる称ふ
男ふ限れア。思ひ混ふべうらば。那泥。伊呂泥。宿禰ふどの
泥も是れゆ。那祢の事た。神武天皇。段ふ。伊呂泥の事ハ安
寧天皇。段ふ。宿祢のことた考元天皇。段ふ云
し。はと天津日子根命。其外も。某根てふ名た多うふみふ
同じ。根た何も借字ふる。ちて此。御名た。神の御面た滿足
こと云。母さら れア。
せふを以て。淤母陀琉。神の御名是ふゆ。其を望ば。可畏み敬たふ。
意以て負せ奉アし れア。吾屋橿城神。訶志紀た訶志 青橿
城根神。阿乎も阿 古と通へり。
夜と通ふ。吾忌橿城神。阿由た阿 夜と通ふ。
の轉れるふて。別ふる意ふし。○宇比地邇神ア。訶志古
泥神まで八柱の御名た。国土た初と。神の初と。た形狀ア。

次第ふ配ひ當て。負せ奉ひしもれあひ。記傳ていに。豊雲野神をゆと云れば
きど。彼神に。根国の神ふ坐ず。此て言べきよ非ず。其を宇比地邇。須比智邇と申に
は。国と成ぢき牙城含矣る状をひ負せ。大斗能地大斗乃
辨を申にに。国土に始の状より負せ。角櫂活櫂と申ぎは。
国土に成る状と。神乃成始さる状とを兼て負せ。淤母陀
琉訶志古泥を申にに。神の御身に成整へ体状を稱せひ。
其に大凡を以て。次第ふ御名ふ配當さるふひ。師説よ。国土も神も。
其神の生坐し時の形状の各其御名の如くありしふに
非ず。此をもく辨牙ぎに。疑ありふむもれぞ。実に神は。初
天之御中主をゆして。何れの神もみふ。既て御形に満足
坐ひ。面足神ふ至ひ。初矣て足ひ坐ひとふは非ず。まさ
国土に。伊邪那岐伊邪那美神の時ぎら。未固まらざりし
を以て暁るべし。と言れさる。国土にことに然る言ふ

ら。神の事を言れしに。其に初發段ふる天御中
主神にさらふひ。高皇産霊神皇産霊神二柱に。産霊の本
は大御祖神よ坐ませば。本をりして御形は満足坐ず。
葦牙比古遲神をり始矣て。次くの神等に。御祖神さちの
産霊よ依て成り坐るふれば。其成始矣は。このふら矣此て大
凡の状を。御名よ負せ奉まる如くあらばに有まじ。此物
ふるをや。そに凡人の母の胎内ふて。人とふる趣
をもても暁りはべし。ふわ次て説ふを見べし。○伊邪
那岐神。伊邪那美神。御名義。神代紀口訣て。伊弉者誘語と
云ひ。信ふ此二柱神遘合して。国土を生成さむと互ふ誘
ひ催し給ふる意よて。伊邪之伎伊邪之美と負せ奉しふ
ふべし。之を那と云ふ例あるさふひ。麻奈子手末足末れど
ふ。男神ふ伎を云ひ。女神よ美と云をしに。神魯伎神魯美
命是ふひ。或説ふ。伎に比古の倒反。美は比賣に倒反ふひ

と云ひ。然も有ばし。但し師も此説を偶〻合ふこそとて用ひらきば。はと或説ふ。君を伎美と云は。此伎と美を城合せと依言あらむを云ひ。是まと然も有むろ。然して古言ふ。まと君てふ言の美を畧ぢて。伎とのみも云へり。そも應神天皇の大御哥ふ。佐邪伎阿藝。まと忍熊王の哥ふ。伊奢阿藝ふどある阿藝も。共ふ吾君の意ふひ。師も此阿藝を引て。岡部翁の。伎は君。美も女君ふひと云れし説を用られ。女君を切れむ美とふる。那は汝れるべしと言れさきど。信ぐ所思也。

下ふ沫那藝沫那美神頬那藝頬那美神を云ぐ伯きど。其那藝那美も是と異ふひ。れ伊邪と名る負る神。まと人。地名ふども多うる。そも其出る処くと注ふべし。

ちて古の御名を。御紀ては。伊弉諾尊。伊弉冉尊と書れと。師云書紀も。神名地名ふどの文字。新と撰びて書れとを見えて。他の古書ふ例ふき書ざま多き中ふも此二柱ぬ御名ぬ字ふども。殊と まぢらはしくて疑ふ人あひ。故今此を辨ふ。諾も奴各。反ふれむ。呉音那久ふ依を。久を岐ふ轉して用ひるふひ。久韻を岐ふ用ひる例多し。冉も史記。管蔡世家ふ。冉季載と云あるを。正義ふ。冉作冉音奴甘反。或作耶音同とあれむ。此冉字ふるべし。史記も古〻をりあ万ふく見る書うて。殊と人名ぬふも由あれば。取用られさるふはべし。奴甘反ふきむ。呉音那年ふる城年を美ふ轉し用ひさるとと。諸の例ふ同じ。是まさふ例多きことぬり。今本どもふ。冊冊再ふどのるも。皆寫し誤ふひを知ばし。

○以下。師云。以下以前ぬを漢文ふして。此間の言ふ非ず。故以下をば志母。以前をば麻傳と訓ばし。○幷は阿波世氐と訓ばし。字書了。并者合也。とも見えさめ。○神世七代。神世を也。上代を尊み。當世を貶して人世と爲と依稱ふて。神ぬ所治看せる御世と云意ふはば。師説了。いと上代の人也。凡て皆神ふひし故ふ。然言ひとあるも委ろらば。其は伊邪那岐。伊邪那美神の御世ぞり。早く青人草蕃息ひて。其世了神と称しも。中

ふ重立とる神を申せるおもよ。心著れざりし故ふ。此り神
ふ。そも第二十段。青人草の処り注ふを見べし。此り神
世とゐ為も。天照大御神。速須佐之男命ゐ時を。大国主
神の世までふ云。ゐし稱ゐ遺れゐと所思さめ。古今集序ふ此哥天
地の開け始まゐ々ふ時を。ゐ出來ふ々ゐ云く。人世とふ
ゐても。須佐之男命をりぞ。三十もじ餘り一字も詠れる。
とある天地の云くも。伊邪那岐伊邪那美命の時を云て。
神世をもいもざれども。神世とせるふゐ。其も須佐之男
命の時を。人世と云るふて知られさり。按ふり古も。最
上代ゐ意の残れふ傳りをめて。作きし文ふるべし。其
は伊邪那岐命。天ふ參昇ゐ留坐して後も。此国土は全須
佐之男命ゐ治看ぎき由緒ふふを彼神の豫母都国り入
坐ふ後をば。其御子八嶋士奴美神をゐ。御子ゐ繼く治看
せる趣ふふを。まれらの事ども。第六十五段をり。第七
十九段までゐ傳り。往く注ひ出るを見て

知ぎし。其後ふ大国主神。亦名八千矛神。久しく治看して。伊邪那岐
命ゐ作遺し給ゐる神功を竟給ゐれど。此世までふ此の
七代を。神世と申せふ稱の遺れるを。此處ふ語り傳ふふ
説ふふべし。信り此七代も。天地の初發ゐ時よりして。神の
状も世ゐ趣も。まさいふく異ふゐふふ。
然らば神世と云も。伊邪那岐伊邪那美神の御世までよ
て。是をゐ以來をば。神世とは言ぢるりと云り然らば。天
照大御神の詔命以て。其皇美麻邇く藝命を天降して。所
治看し免給ゐゐしりば。大国主神も幽事治給ふこゆく
成て。是をゐ顯世を幽世と分ゐて。此の七代ゐ神世も更
ふゐ。大国主神の治看しく間をも。邇く藝命をゐ次くゐ

御く代くふ。神世と言ふと聞も。其を万葉ふ。八千桙之神之御世自云くはと於保奈年知須久奈比古奈野神代欲里。伊比都藝家良志云くふど詠る歌の多り侯た。大国主神隠坐して。後の神世より言へ。ひし稱れ遺れる処。少毘古那神をも竝法る申せるた。此神久しく大国主神と共ふ。天下を造給ひしくしらばふ。さて古事記ヲ。八島士奴美神を。次く。其子くれ名を挙て。右件自八島士奴美神以下遠津山岬帯神以前。称十七世神。とにる。其世くよた信ゲさく所思もる神名の多りる故ヲ。採用ひざれど。其世数ふ大国主神も加き。此れ按ふよ。迹く藝命をり次くの御世より言へ。ひし稱の遺れるを。世数も神名も。訛ひふ訛りて傳れき事ふるべし。其は人世とふめて後より。鵜草葺不合命の御時までを申ば如くより。迹く藝命を。後の神代れ時ヲハ。万と大国主神の時を。かく申ゑべき事情を深く思ひて辨ふべし。師云何時まで我神代とし。何時をり以來た神代ふらばと云きはやうれ当差はふ。故ふ。万葉の歌ともふもふく古を廣く神代と云。六巻ヨ。日本国た皇祖の神れ御代を申し。同巻ふ。神る。国ヨし有れぞとは。神武天皇れ御代を申し。同巻ふ。神代を。芳野宮ふ蟻通ひ。高知ばた。とにるはおれも人代ふふりての事ふり。十八巻ふ。皇神祖の神れ大御世と垂仁天皇れ御世ををめ。まさ一巻ふた。當代をしも讃奉て。神の御代とを。然れども事を分て云ゼ。鵜草葺不合命はでを神代とし。書紀ふ此。までの二巻を。神代上下と標別とし。神武天皇を。姓氏録ヨも。此までの御子孫を神のを。皇別とせられさ。以來神倭磐余毘古命をり以來ヲ人代とば信ふ。此天皇命れ御時を。世間の侯さは新ふ。しらば。然も云ばきもれふり。七代た。那く余と訓ばし。万葉十九ふ。橘大臣を壽げる歌ふ。古昔爾君之三代

經仕家利。吾大王波七世申爾と所已。まさ父子相続もて
ゆくを。幾都岐といふ。那く都岐とも訓べし。聖武天皇紀に。尾張連濱主哥
むぞ勝るべき。けて此を十二柱神のうち。初二柱を獨神成坐し。
次十柱を。女男二柱ずつ耦坐れば。あく十二柱神世と申
ては。其趣分已難き故ふ。後世嗣の例ふ准て。假ふ七
代とを申せる如已。されば此を。父子相継如く。前の神の御代過て。次神乃御代と成ふけるふ生
を非ず。上ふも云る如く。此七代の神さちを。追次ひて生
坐て。伊邪那岐伊邪那美神までも。おの天地の初。此時ふ
已。其證を次巻ふ見えさり。後世ふ此七代を。天神七代
と申し。後五代を地神五代と申に。ふ。いろふるをこそ
の者は云。初ふ成る古と。ふ。更ふ事の由をも考へ。ず。あく
ふ強て。天と地とふ配むとて。の漫説れる。世ふ普く云
れき。その太じ已非ふ。るとを。を辨へさ。ふ人も。をさを
さ聞え。ぬを。いろふ。ぞや。先此七代を。天神と申せる古と。

古書ふ見えとる古と。已し。既ふ天之常立神の下ふ上件
五柱を。天神と申に。とし。ふ。れ已。れず。其次くを。天神
と申に。ふ非ざ。ふこと明し。天位を知。看を天神と申に。ふ
ぞ云説を。近世の漢意の例の私言ふり。天ふ坐神を。こそ。
天神とは申に。ふ。れ。然る。ふ伊邪那岐伊邪那美神の御事
を。記せるさまを考。ふ。ふも。天ふ坐神とを見えば。此地ふ
坐神とこそ見えさき。然れ。かふ。ふ此七代を。並此
国土ふ就坐る神。ふ。ちふぞ有々る。然を所れども。又正し
く是を地神と称せることも。物ふ見えざるふり。地神と
は。後の五代ふ至て。此国土ふる神を。天神ふ對て。申に名
ふぞ。ふり。ふ。さ。ふ又地神五代と申に。も。甚く違へる古
と。ふ已。ま。ず。天照大御神を。高天原を知看せ。ず。天神ふる
古ぞ更ふ已。次ふ天之忍穂耳命。日子番能迩迩藝命も。高
天原ふ成坐。ずきず。天神ふり。故是ふ以て。穂ゝ手見命を
已以下を。天神御子と申に。れ已。さて此穂ゝ手見命。鵜草
葺不合命を。此国土ふ生坐て。此国土ふ坐ましゝのば。天
神とを申さ。然れども。又此を地神と申せる。古とを。更
ふ物は見え。已。国土ふと生坐ども。天神御正統ふ坐ゲ
故ふ。皇美麻とも。はさ漢文ふを。天孫とも申に。ふり。かゝ
きず。天神七代。地神五代と申に。を。返く。當ふ。ぬ安。称と知

法し。又此七代五代を。天七星地五行ふ象るといひ。或た易の八卦と云物ふ配當て說。あぐひた耳ふ觸聞くも穢しく。ふむ。○上二柱者云く。此た十二柱ふして。七代ある由を云へる例ぞ。○各とは。師云。己くと云ふ也れぞ。己の仮名淤能あきば各も然ふ。袁を用るは誤れぞ。稱德天皇紀の詔ふた。於乃毛於乃毛と有ぞ。毛た辞ふ。○十神二神た。師云登婆斯良。布多婆斯良也訓法し。上ふ二柱と書るは古語十神二神た漢文ふれば。古語の方ふ倣ひて訓ふ也れぞ。古事記ふ。如此一段の内ふ。同格れ言を古語と漢文とふ書變さはも。古語れ方を則として訓法き。凡ての例を知らせある例ぞ。他段ふ。神あちれ數を擧さはも。或た若干神。或た若干柱と書さり。

みれ準ず。て訓法し。人世とふりての皇子さちの數を云へるも。みふ若干柱と書ぞ。さてまさ二柱神三柱神ふ也云へる也とはるを。柱字を畧れ也。二神三神とも書る。此類た柱てふ言を添。まさ神字ふも訓べし。其処の文れさまふ隨ひ也。○篤胤按ふ上宇比地邇須かふもかくるも訓むべし。比智邇神と云ぞ。伊邪那岐伊邪那美神まで。男女二神ぞ。俱ひ坐る十神た。實は伊邪那岐伊邪那美二柱神のみふて。宇比地邇須比智邇ぞ面足惶根と云までは。決也て伊邪那岐伊邪那美神の御身の漸くふ成坐る狀を以て。次くふ御名を負せ奉れるを終ふ五代とは語ぞ繼ある事と所思さり。其は宇比地邇須比智邇ぞ申た神の。實ふ坐くあらむた。天神の國土を修堅也むと也ぞ。

此二柱ふこそ命せ給ふ法れき。然るふ最末ある二神ふ命給ふ法ふと道理ふ叶てば。殊ふむ前ある四代の神さ坐ると云こを詳ふらば。將天地初発れ時ふ成坐る神等て。一神をして無用ふ成坐るもふく。天皇祖神の天國大地根國を作給てむ為ふ。天ゐ二神根國ふ二神大地ゐ二神を産成給へふと疑ふし。猶云はく。國くゐ坐ば諸神の社て。幾千万ゐるらむ。計ひ知べきふ非ず。其中ふ祭神れ知られざるも多うれども。古く聞えさる御社ふ此神等を祭きゆと云ハ。有るふを無し。但し後世ふ物知らぬ神家者流ふぞ。第六天神と云ハ。面足惶根神ふゆれど云ふ類て。本くり論ゐ足らば。其外も此等ふ準へて。附會ふる事を知るぢし。然れば此れ神世七代て。國之底立神豐斟渟神て。根國の神ふきは。大地の神れ代數ふ入ぢき謂ふく。宇比地邇神と申。惶根神と云までは。伊邪那岐伊邪那美神ふる故ふ。實ゐは只一代ふぞ

有れ法。然して天國ふ成坐法二神。根國ふ成坐る二神。ともふ男神ふる。大地ふ成坐せる神れみ。男女倶坐るふを。深き由ゐる事ふるかも。ふゐ第六段ふ注ふ說どもを合せ見て。此段の十神て。伊邪那岐伊邪那美二柱神のみふるべき事を辨ふべし。

爾其天神諸尊命以而。詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神。修固成是漂在國而。賜天瓊戈而。

言依給矣。故二柱神。立天出浮
橋而。指下其瓊戈而。畫給青海
原則。鹽許袁呂許袁呂然畫鳴
而。引上出時。自其戈出末垂落
出潮。自然凝積而成嶋。是淤能

碁呂嶋也。二柱神。於其嶋天降
坐而。以其天神出所賜出天瓊
戈。衝立其嶋而。爲国中出御柱
而。見立天出御柱。化作八尋殿
而。共住給矣。故其瓊戈。後者化

小山矣。

天神諸を。初段ふ見えある三柱天神ふ。下ふ至てて。何事ふも高皇産靈神之命以而云くと所ふの体を。此ふのみを。彼大神を分てはふ挙げしてかく天神諸とあるは事始の処ふれぞふるべし。師も天之底立神葦牙比古遲神を入れて五柱神を言ふ由ふ解れさきど。決ふ処て彼神さちれ関ふ給ふ命令ふハ非ぞうし。諸とは三柱を集ふて申せるふて。天神ふ屬さる言れ。其を師説ふ。天石屋れ段ふ。八百万神諸咲。倭建命れ段ふ。后等及御子等諸下到而云く。孝謙天皇紀。皇大后の宣命ふ。汝多知諸者吾近姪奈利。稱德天皇紀乃宣命ふ。天下能人民諸乎愍賜云くふどの。是等と同じ例ふて。

古語の用さはふ。まと諸とばゝ。ふも云ふとと多し。万葉二十ふも。母呂母呂波佐祁久等麻乎須。まと藥師寺佛足石歌ふ。都止米毛呂毛呂。れどの。是ふ。此諸字を加多閉能と訓るも非ふり。此も眞字伊勢物語ふ。諸之人と見え。まと漢籍ふも然訓ることあ。其も誰ふまれ。一人のふとを云処ふ。その傍ふ。他の人共を指て云ふ。加多閉能人とも訓るふれど。固り其意異ふるを辨へ。諸字をむ。凡て然訓むも妄ふり。○命以而師云命ハ御言ふ。式の祝詞ふ。天津神能御言以て。更量給氏云くれどの。例以て知べし。即命字の意ふり。是を神の御名ふ。某命と申ふ命の意ふ見るは誤れ。以て母知氏と訓ぢし。其由ハ記傳訓法條ふ云るゲ如し。まと命袁と袁を添ふて。直ふ美許登母知氏ぞ訓べきこと。右ふ引く祝詞の例。まと彼訓法の処ふ引る。哥どもれぞの例を以て知べし。

ちて此命以は。国司おぎいふ母知とは意異おゐ。彼ハ命を承ゐ。て負持おゝろれ。此ゐ命爾氏と云むゞ如くふして以は輕き辭おゐ。○伊邪那岐命。伊邪那美命。古事記ゑ。上段ゐ神とゐる。此ゑ。ては命と申せ。ゐ。別ゐ意おし。上ゐ他神等みゐ某神と申ゑ。ゐ。それと等しく神とは申せるれ。下ゐ至りてゐ。大神と申せる処もあり。ちて凡て某命と。御名ゐ下ゐ命てふこゑを添て申ゐゐ。尊ゐ稱おゐ。御名のみおらば。天皇命。神命。御祖命。皇子命。命汝命おゝ。も云。ゐ。古事記方葉れゑゐ多ゝ。さて美許登てふ言ゐ意ゐ。私記ゐ美許登猶如言御事也とゐ。是意おるし。昔より人ゑ就て思ふる説おれゐ信ゞさく。且とゝわ。も叶はゑ。はゝ師ゐ此言の意は。未思ひ得ゑと云れさめき。まゝ私

記ゑ。受上天之御事。而奉行ゑる故ゑ。御事と云とやうゐ云ふる説ゐ非おり。そは中昔ゐ書共ゐ。人を指ておおゑ云おゝとゐ。是と同語ゑ聞えさめ。於許登ゐ郎。御事ゐ此ゐ直ゐ神人をちして。其名を某として。敬へる詞おゐ。呼と知ゐ不禮き故ゐ。稱ふる言おるし。神命妹命おゑの類。ゐゞゐ神とも妹とも云てあるべきを。命てふ言を添さる趣の。ゐの聞ゆるを思ふ法し。さて今世ゐ。人の上を云とて。某殿某様といふも。直ゑ其人の名をちゝ。ゑ。辺おらひゐ其方を云ゐて。古ゑ命てふ言を添て云ゐと。全同じ意むへゐ。ゐ。さて佐麻てふ言ゑゐ。方字をく當れるちて命字を書を。様字を書。は。訓を借て書るゐみおゐ。おゑは。師云。本御言と云ゐ此字を書。るを。言ゐ同じ知はゐ。尊稱の美許登ゐも借て用さゐ。ゐ。凡て言ゑゑ違、祢ゑ。文字ゐ義ゑは拘ゐらば。左ゐ右ゑ借て書るは。古、の

常あり。此字ハ目を付て、その意を思ふべきよ非ず。けて書紀ハは。おれ美許登を。尊字と命字とハ書別て。至貴曰尊。自餘曰命。竝訓美擧登と註されと。おれ君と臣を。稱の同じ紀を惡みて。强て別むあ米ハ。文字を書ゐ牙給ふ撰者の所爲ハて。其尊は字ハ意を取て書きされど正字ハ。命ハ古ヘを。書來しを。其隨ハれど。猶借字ハ。然るを爭ハて。この命字をも。臣ハ君の命令を承る意ぞれど云ハ。いさく强言ハり。もし强て云ハば。命令を出ス人を命と云むハ。猶ハとを。有ハ似さるを。其を承る人を然云むハ。甚く事さゞへるをや。○是漂在國ハ。本籍ハ。多陀用幣流之國と有しを。かゝ文を成せるれを。初免大虛空ハ生を。て。混沌あを。し一物の判を。て天と萌上を去を。泉は垂下り付て。宙ハ止れる物を指

多詔へるれゆ。彼所ハも如浮雲無根係所而漂蕩とあると。言の同じきを以て悟るべし。けて彼處ハも云ハ師說ハ如く。未國と云物ハハ時ハきど。も。出來て後の名を以て。其初をも如此國とは語を傳牙しれを。實ハ此時ハ。多ハ潮のゝ如く〳〵疑ハ年として。さて。ゝ牙ハのみぞ。けて其漂へハ狀ハ。此時天日ハ御國は。既ハ萌上を成て。大空の中央ハ位處定まを。其處ハ居ゑ〳〵。いを健剛く旋轉りて在るゞ故ハ。其勢ハ掣れて。其天日を中ハ置て。大運ハ周ハぐら。も。仍屯くとして締ら爻。漂ひて在しれを。米具流と多陀用布をハ。甚く異ハれゞ。勿思ひ混へそと。米具流とハ。輪形ハ正く行くを云ひ。漂ふとは締。おく屯くをして動くハを。○修固成。修ハ作を同じハとれを。師云國を修固と云語ハ。神

皇産靈命の少毘古那神の事を大名牟遅神ふ汝葦原志許男命と兄弟と爲て其国を作堅めと詔へ給ふと下ふ見えはと其二柱神相竝びて此国を作堅むともゐの已文德天皇紀宣命ふ佛毛平尓奉造固ふどもゐの已和名抄ふ修理職をゞ乎佐女豆久留豆加佐とあり成とは成し竟へと云ふと如已是も大名牟遅神の段ふ国難成ふどゐの已書紀ふも其処ふ成不成の論ひあり已ちて作堅めを成とは似たるふゞをかく重て云た古語ふゆ○詔た師云能理碁知氐と訓ては能流とは人ふ物を云聞せふと如已已ゞ名を人ふ云聞せを名告と云て知ばしはと法を能理と云も上へ已云くせへを定て云聞せ給ふへゆ出と已告は

多謂ふど此字をも能留と訓るふと古事記まと万葉ふゞを數多ゐの已此等の字を今本ふも誤て異さはふ訓る所多し古語ふ味き故ふゆへく考へて正しく已ちて此詔字美許登能理とも能理賜布とも云已美許登能理た御言詔ふり能理賜布た詔賜ふり其所の言ぬ常ふ能多麻布と云た此理を省々る如已其所ぐ如ふ因て訓ざはいちゝ異ゐばしちまど能留て ふ言はいぬくふても離れぬふ已本それを已様くふ用分ゐる故ふゆ能理碁都た崇神天皇紀ふ令諸国とゐの已應神天皇紀ふ令有司と見も哥物語ふ獨碁都所聞碁都ふて詔言為を約免とる言如已政碁都ふど云ると同し格御口ぬうら碁豆ゐへゐふゆと有た源氏物語東屋巻ふ帝の ふいひふきて能理を省々る語れるべし○天瓊戈は古事記ふ天沼矛と書

紀神代紀ふまと瓊弄とも書て。瓊此云努と訓ム。但し是をトホコと訓來れるは。云ふ足らぬ俗訓ふめり。努はヌの仮字ふる物をや。努字一本ふ貳と訓ムしをし。私記ふ見えさめり。古事記ふ沼とゝけるは借字ふめり。瓊を說文ふ赤玉也と訓きぞ。拘を訓ムのらば。其は字彙ふも。按詩言玉以瓊者多矣。瓊華。瓊英。瓊堂。瓊瑤。瓊玖。皆謂玉色之美為瓊。說文訓作赤玉。恐非也。謝莊雪賦林挺瓊樹言其白也。豈赤之謂乎といへり。師云玉を奴と云訓は。神代紀ふ瓊響瑲く此云奴儺等母く由羅爾と訓る奴儺等ハ。卽瓊の響ふ。能と那と云も。淤を畧くも例多し。けて神代紀今本ふ瓊響二字脫さめり。まと奴上ふ乎字あるも衍ふ。はゝ其說ども皆誤れ。古事記と合せて考るとき紀は自ら明らけし。かくて瓊を書紀ふ常ふ邇を訓ぬば。それを通音ふ奴とも云しふ。今云古事記ふる天沼琴を詔琴と誤れる本共ふ依て。記傳ふも其意ふ釈れ。あきど。実は沼琴ふて。玉を奴と云ふし一證ふり。そは第八十六段の傳ふ注ふを見るべし。ふ不言はゞ。蕤字は青蕤。玉。天。蕤槍ふど云て。奴と訓は常ふて。玉の意ふり。其ハ神名式ふ隱岐国玉若酢命神社とあるを。三代実録貞觀十三年八月の下ふ。蕤若酢神をあり。ふれ正しく。奴と多麻と相通へる例ふめり。和名抄ふ。楊雄方言云。戟或謂之干。或謂之戈。和名保古と訓ム。まさ同抄ふ釈名云。手戟曰天保古とあれど。此方の古書ふは。戟矛ふど。字ふれかはら。皆通はして書ム。桙とも多く書さめり。矛は天保古と云るは。古名ふれ。のらじ。手戟を云るふ。ふきての事ふるばし。上代ふは。殊ふ常ふ用ひ玄兵器ふて。古書ふ多く見えさム。今云。第纏之稍。廣矛。八尋矛。著釈之矛。檜矛ふど云。称見えさめり。瓊戈は玉桙と云如く。玉以て飾れる矛ふるばし。古は。かゝる物ふも玉を飾れる。常のさとふめり。ちて万。此物ふ天之某と天てふ言を上ふ添て呼こゝを。皇美麻命の天降坐し時。大御

身ふ服御物。まさ御從の神等れ。とアどくふ持ち物ふど。凡て天より降來し物多し。其時ふ此国の物と別ちて。天物をば天之某と呼し例アア。今云天くめ持來坐る物の。殊ふ卓れて美ラアしこと。神武天皇の御執しの物どもを。長髓彦ぐ見て。蹴躓さアしを以て母知べし。ちて後ふは。此国ふて作る物も。彼天物の制ざ乃ふ習へ爲をば。然云々らし。今云。今世ふも。唐物ふど。まゐ轉アては。何とれく唯美いふ〻此意ぞ可ゐめり。それむさ天物む美しラアしをりれふとふめり。称て云アと思はる〻も有例アア。ちて此類の天む後ふは。みふ阿麻能とれみ訓ど。倭建命の御歌ふ。阿米能迦具夜麻。仁德天皇紀の歌ふ。阿梅箇儺麼多れども有ば。阿米能某。阿米某ふど訓べきも有ばし。

さまど定ふる證の見えぬむ。姑く舊訓ふ從ひ奉る。さて今国を作固免をとして。此示を賜へるふと。如何ふる所以とも知ばらら免。穴畏。後の世れ心もて。推量言例爲そ。まさ此示ふ。例の種くれ說あれど。皆云ふさらず。或む今伊勢れ滝祭宮の地底ふ藏ふふ。ど云もいと〳〵信難きことふりらし。○篤胤今按ふ。師は此示ふ賜示るふと。如何れる所以とも知ばららば。と言れ爲まど。此む二柱の產巢日大神の。產靈の御德を。伊邪那岐伊邪那美二柱神ふ靈幸ひはして。国土を生み作成し免給むむ。其御璽として賜ひ〻むふとむ云も更ふて。殊ては彼浮雲の。根係る所ふ充ゞ如くして漂蕩へ係一物の叢〻をして堅まらざ爲を畫疑ふる。大地れ固

矛の柱ふせとと此御量ふぞ有けふ。その趣下文に見えあらざれど。臆度言ふも

さて其瓊矛の狀を。いのれる物ぞと云はむは。是は

天神の靈妙ある御德を以て。造出給ふる物ふれど。今い

のふとも考ふ知ばきふは非ざれども。強て云はゞ。鐵氣

の純ある物ふて。金玉此凝成れるゞ如き質ならむと所

思ふ処。其れいのふと云ふ。此物ふ依て。大地の締固まり。終ひ小山と成て。国中の御柱と成るを以

て。然も思ふ。ちて其形を何ふらむを云ふ。決矛て男柱此

ふ〳〵ふり。其も此瓊矛も。皇産靈大神の御靈ふて。其

形狀れるばし。本ハ。彼溟渤而含牙と云る牙此形ふ似さ

る物ふるべき理ふれば。然らば。瓊戈を云ふはいのふを云ふ。其質

ハ鐵ふれぞを。玉此付さる故ふ。玉戈を云ふも有けふし。

瓊戈と云も。玉戈と云ふも同じ言ふり。斯て師説ふかゝ

る物ふを玉を飾れる。常の事れりと云れ居きど。此も飾

のみふもあらで深き由ある事ふるべし。又多ふ。其物を稱美て云ふるふも

有むう。男柱も。是ふ擬へる物ふを。玉莖と云ふど思ひ

合ふ。合ふ。れふ次段成餘之処を云る処をも考へ

合ふ。或人問ひて曰く。此を皇産靈大神の造り給へりと云

ふと心得ふ。然るハ是時ハ。未ゞ金も玉もふき時ふるを。

いふして造出給へふることぞ。答天地をゞふ鎔造し給

ふ神の。何物ふを造成し給ふざらむ。其産靈ふ造り給へ

ること言まくも更ふり。凡て神の物を作り給ふと皆

邪那岐大神の御劔のごとき。唯ふ劔と云ふゞ。常の劔此

如く思ふふ。稜威之尾羽張神と申て。現身の神ふも坐せ

り。然れど是も。伊邪那岐神の産靈を別ちて。劔とふし給

ふるゞ。まさ神とも成て坐まけふり。ふわ下ふる化作八

尋殿とある処ういふ説をも合せ考ふべし。○賜て多麻比氐を訓ぢし。多麻波理豆と訓て受る方をりいふ言ふれど賜ふことを然読むて後世の非読おほ。けて多麻布と云おをは師説ふ伊邪那岐神ぢ天照大御神ふ御頸玉を賜へ故事をぢ出おらむ故その物を玉物とは云れらむと言れさ故て然言れでら彼をぢ早ぢ此の玉戈を賜ふる故事を本と云ぢし其は此御戈ぢみおらば伊邪那岐伊邪那美二柱神の御身も産巣日神の産霊ふ成おれど更ふも云ば其御魂も産巣日神ぢ賜ふる物りて賜物の有ど中よも奇霊ふる物ふしのきど此をうち任せて多麻とは云ふぢ是云れはち幸魂奇魂ふふむ有れ故そは神のみふ

ら足人の霊を多麻と云も同じく産巣日神の賜物ふる由れぢ幸魂奇魂の事て下第九十五段ぢ傳ふ注ふを見べし。○言依給矣師云言て借字ふて事れぢ。即事と書る所もの。若言ぢ意ふらば御言依とのるぢきふ。何の書ふ母御と云るハ孔し。依て因とも寄とも所寄とも書て。即字の如く與須ふるを延て云言れぢ。佐須を切れど即須ふり。凡て古語て延ても縮ても云と多し其例て次の立ぢ所ふ云。然らば與世を延ては與佐世と云ぢきを與佐斯と訓むていのふと云ふ。古て與世を與斯ぢも云るれぢ。今云此説て第百十二段ぢ哥ふ米呂余斯迩余斯余理許祢とある処ふ注さむと此ては省ふ。けて與佐斯と訓む慥ふる證て聖武天皇紀詔ふ。吾孫ノ将知食国天下止與佐斯奉志麻爾麻爾とのぢ。

佐を清て誦べきあとれ。与須の延とる言ふるけて與佐多以て知ばし。今人多く濁るむひがことれり。須とは任字をも書て。事を其人ふ依任せて。執行をあむる意ふ已。光仁天皇の藤原永手大臣の薨れしを悼坐る大命ふ大政官之政乎波誰任之加母寵伊麻須と詔へるも誰ア任せ置て身寵坐そとあり。まと封字を訓も其国の政を其人ふ依任ひ意れ已。言依てふ語を此巻の下ふも続日本紀の宣命式の祝詞あどまもふのまと見えて。皆同じ意れり。書紀ふは勅任ともふの已。まと應神天皇紀ふ任大山守命令掌山川林野あどもふの已。給を。上の賜とを異りて。多く尊みて申ひ附辭れ已。○天之浮橋を神れ天と已降り給ふ時ふ。大虚空ふ浮べて乗ゐ乃ふ物ふる故ふ。浮橋といひ。和名抄ふ。魏畧五行志云。洛水浮橋。和名宇岐波之とふる。訓をさるふとれきど。水上ア浮さはれきば。物を異ふり。まと如此乗て往來去ふ去ぞは。水を乗る船と等し。記物ふる故ふ。天盤船とも云ふ已。其由を下ふ委く注ふを見ばし。記傳ふ。此を丹後国播磨国ふどの風土記ふ見えさる。天梯立と同物ア解れさきど然ら去。其由を第三十一段の傳ふ注ひ。浮橋と磐船ぞを同物ふる由は。第百三十七段れ傳ふ注を見べし。師説とを甚異れり。○立は。古事記ア訓立云多く志とふの已。此を師言れ如く。依を與佐須と云ふ同くて。延ゐる言れり。行を由迦須取登羅須持を毛多須守を毛羅須待を麻多須ふど。凡て如此様ふ延て云常のふと。如く聞も。然れどもはと賤き者の上ふも。然云ることふのふ見さり。けて此の多く志を。常ア立を延て云ぞは異ふして。推古天皇紀歌ふ異泥多く須とふのゐふ同じく。出發しさる由ふて。万葉歌ふ。御輿發しぞを云ふ如く。浮橋ふ御船發して。天と已此国土の上ふ

寄來(ヨリキ)るあるへふを云。そは此時天と地とは。既ふ斷離(キレハナレ)されむふ。其は何を以て知(シ)と云ふ。天神の此(コ)れ御言ふて知られるめ。然るに天神諸(モロ)高く天(ア)御国ふ坐(ヒ)くて。此国土れ漂在(タヒ)を見下し坐る趣の御言れるふと。是と指し詔ふる御言ふて著明(イチシル)し。もし此時もふか。天と地と斷離(ヒ)ざらはしのば。其根と在る物れ漂蕩(タヒヨヒ)さらむふは。天も共ふ漂ふ法き理ふれむ。いので其を指て是漂在国とも詔ふ法き。熟想(ヨク オモ)ふ法し。然るを三大考ふ。此天浮橋と云を天と地との連(ツヅ)ける筋ふて。天と地とも皇美麻命の天降坐て後ふ。斷離れと(ハナレ)と説(ヒ)るは。委く思もざめしふめ。是時既ふ斷離(キレハナレ)きるりし故ふ。二柱神は天浮橋ふ御船(ミフナ)發(タ)して寄來(ヨリキ)坐るれ(ア)。さるを神代紀、

一書ふ。二神立(ヒ)于天、霧(ヒ)之中とあるは。浮橋の事を脫せるふて委からば。○指下(リヒオロシ)も。かの虛空(オホソ)中ふ浮雲の如く漂へる一屯(ヒームラ)れ。謂ゆふ玄牝ふる物れ中ふ。ぢし下し給ふれ(ア)。○青海原は。万葉二十ふ。阿乎宇奈波良(アヲウナバラ)と所ふ據て訓法し。青海原の宇も。神代紀ふ。滄海。滄海原ふどをかく訓るを取て。正宇ふ書ること。徵ふ云、るが如し其も式、祝詞ふも。青海原と書さまむふ。上ふ天神諸(モロ)の。是、漂在国と指し詔ふる一物を。廣く見悠(ミ)かしさる狀もて稱ふ法名ふ(イ)。宇那(オモ)も宇れ如く宇美ふ。そを原と連(ツヅ)く音ふ轉して。宇那とも云ふり。言便ふ。第四の按ふ。此も生(ウミ)と本同言れらむ。然るは彼、一物も。産巢日、神の神靈(ミタマ)ふ因て。産成(ウムヒ)し給ふる物の初、ふ(ア)しろば。宇美てふ名を專(モハラ)と負(オヘ)るふるべし。宇年斯も宇美と切

まる。ちて其宇美は宇比と通ひ。宇牟とも活きて。宇夫と通
牙ア。そは事物の初くしきを宇夫某と云こと常多し。然ればその産成し給牙る
まゝ此初ある原と云義を以て。宇那原とは云ある故し。
かくて後ふ。宇書等を見るふ。海、天池也とも。或た大壑也
とも云を思へば。海とたもと。大地の玄牝さる処を云名
ふるゞ。弘くあアさるれ体べし。さて其玄牝ある体処はし
も。万物を生出安とふ意を以て。宇美と云てた非ざるゝ。
然もあらぬ前ふ云と。宇美てふ言は同じれ也。宇牟と
宇麻留くと。自他の異あア。何あらむ猶とく考ふ法し。
さて青とは。其初くし紀時をちして云体言ゝ。其た事物の初くし
きを。青某と云こと多ゝア。青人草此青おどもは
是ふア。青女房。青侍ふぞ云ふこと。常ふ多かゆ。はと見遥
ゝし為る狀の。蒼くと廣く見も体故ゝ云ゝ。此二。此う
ち今定免ごの為し。後人をく考牙てよ。ちて青海てふ本義たかくの

如くふて。大地を總稱ふ名ふアしを。後ふは海をたみ云
ふ言とふれアは其は式れる祝詞ともよも青海原と云体
た。此意ふ云ゆ。然れども是はと謂有こをふて。未国處の
成ざアし不どは。總て潮原ふアしゝば。国處成て後も。そ
た潮原ふる處なば。本をゆ言習牙体まゝよ。青海原と云
繼ぎ來べき勢ふアかし者。所知青海原潮之八百重と依第二十九段速須佐之男命
し坐る処ふ註ふ説ども。を
も。合せ考牙て辨ふへし。○畫給則師云畫字ハ書紀一
書ふも畫滄海とも畫成磯馭盧嶋とも有アて。似ある事
れごゝら。猶此字た意ふは非祢ど借字ふゆ。式の祈年祭祝詞ふも泥畫寄
旦と書り。此ら古、をアは書來し字
を。そのまゝふ用ひさるふゆ。此迦久た。攬宇ふどの意

ふして。俗語ふ加伎麻波須と云ふ如し。書紀ふ以天之瓊矛指下而探之とあり。彼一書の書を。口訣ふ。以矛探海也と解さるゝ。とく當れり。書字ふ就て云へる注も。おゝふ惡し。けて其字迦久と云。爲も。凡て手末して爲るわざを。迦伎云くと云。迦伎上ぐ。迦伎因に。迦伎乱安れどのおとし。はさ必しも手末て爲ふども。其狀の同じ紀は。物もて爲る事歟も然云ふ。痒を搔く。字繪ふど歟書く。木葉ふどをかくの類ふ。此は彼空中ふ漂ふ爲。潮ふ泥の和れる一沌れ物を固免む爲ふ戈以て攪探り給ふれ。彼書紀の探れ。上下の語を思ふ。探求る意ふり。此れ迦久は。求る意ふ非ず若是ふ然る意とせむ。許袁呂許袁呂迦畫成とあるふ叫れ安。且ふ天神の是漂有国と指て詔へば。漂有国も著明ふまぢ。尋求給ふべきよ非ず。○鹽も潮ふ。塩と潮と字は異ふれども。斯富名も一ふ。師の言。きさるゝ。

とし。和名抄ふ。潮和名宇之保。齊明天皇紀の大御歌ふ。于之哀と。あり。此は是を斯富と。れみ云るも常れ。とれ。常ふ用ふる塩を。うち任せて斯富と云ふども。此の文ふ依りて思ふに。古くふ斯富と云れ。潮れふとて。用ふ塩を。堅塩と云。と所思ふ。其由も。用明天皇紀。堅塩姫の処ふ注べし。けて此ふかく鹽とあるふて。其一物も。潮ふ泥れ和て火氣を含免ふ。混成し。質ふる。ふと知られふ。そも宇比地迩。須比地迩。神の御名ふて。泥を含免ふ。ふと著く。もし火氣ふく。潮と泥ふのりふを。凝固まりて。葦の生むこと。を更ふも云に。天も萌上るはじき理ふ。を。此を然まで言ぶとも有べく思ふも有。ふむゝ。其れ猶不熟心ふ。けて其中ふ含はて。ふめし牙ちふ物も。萌上めて天国と成て。又根国と成ぢき物も垂下めて。其跡ふ。ふ物を固免て。大地とは

成給るれ。天圀の事は第二段ふ出根圀は事は第三段ふ既う云ゆき。まと宇斯富と云は初斯富の義ふも有む。○許袁呂許袁呂然ハ。師云彼戈以て迦伎給ふふ隨ひて。潮の漸くふ凝ゆく狀ふ。即許袁呂と凝ゆ言も通へ。雄畧天皇段ふ大御盞ふ落葉の浮るを三重の妹女ゞ哥ふ美豆多麻宇伎尓宇伎志阿夫良淤知那豆佐比美那許袁呂許袁呂尓云くと有ると同じ。ちて此の狀を物ふ譬へて云はば。膏れゆを煮堅むるふ。始は布どは水は如くれる戈。ヒもて迦伎免ぐらせば。漸くふ凝もて白くゞ如し。但し膏を煮むはさはことあれゆ。潮は如何かき免ぐらせむとても凝むむこゆいのゞと云。疑も有ぬべくれど。此は産巣日神の産霊ふ依て。圀土の初まるぼき神の御為あれバ。今尋常の小理を以て。左ふ右ふ測云べふふ。ら爰。今はさゞ。其狀ふさと冥て云るれみあり。○畫鳴は師說の如く彼漂冥る物を迦伎て。稍凝さる物ふ成ふり。鳴は借字ふて成の意ふ。即御紀ふは畫成と書。然らば直ふ成字を書べきふ。物遠きは字を借れるは。今は如何ぞや思はるきども。古は例の只何心ふく書來し字を。やゞて其まゝふ書るれ。そは古は琴を彈鳴を比伎那須。笛を吹鳴を布伎那須。鼓を打鳴を宇知那須ふど。凡て鳴を那須と云し故ふ。成ふ此字を借きるふ。ちて其迦伎成ふ冥る御手は運の狀を思ふふ。譬へば挽臼ふどを廻らは狀ふ物し給ひは。むとと。手の運びは自然ふて。迦伎廻ふ爰と云は。此狀を云。古爰れ。と。今現るふ大地の一畫夜ふ。右旋一轉爰ふ狀ふて知らきふり。まと此大地は右旋はる理ふ因。古とく見えて。草の蔓は物ふ纏著くを見るふ。大のと右旋ふ纏へ。そを試ふ左旋ふ巻付て見ふ。決免て本の如く右ふ旋るふり。已幼き程くり。かゞる事ふ心を附る僻あ。て。數見し中ふ。百部根と云ものと。草蘚の

蔓。その外ゐ二種ぞかゐそぞ。己ゞ見知れる中ゐも。左旋ゐ巻付て在ける。此らは変とも云ふべくや。此ゐ就て教子ある西原晁樹ゞ言ふ。迦久ゑ云言ゖ義を猶思ふゐ。手末をもて爲ゐとゐ専ら云は元ゑゐゐて。其爲狀も何ゐまれ。我手もて。我身ゖ方ゑ向けて爲ゐわざ外ゐ。師の挽臼をまゐ状もて譬られとるは。熟當れゐ。万葉ゐ。赤駒の足搔を速みとゐるも。信ゐ馬ゖ驅足といふ足ゐうひも。常ゐ馳歩むゑは甚異ゐして。前足も共ゑ搔ゞ如くゐて。其蹄の跡も多ゞ踏ゐゐとは違ひて。土を搔て跡ゐゐ物ゐゐ。されど迦伎寄ゐ。迦伎懐く迦伎鳴ゐ迦伎握むもみ外方ゑ物ゑゐゐも非ず。まゐ田人の田畑の。溝ゐどを鍬もて決るを。吾ゞ筑後国ゐどゐても。溝迦久と云も。鍬も

己ゞの身の方ゑ向て用ふ物ゐれぞかく云り。木葉ゐどを迦久と云も。痒を迦久と云も同じ。まゐ蚤のまてゞ紀と云も。潛ゑる時ゐ。左右の手を隙ゐく。身ゐ向々て迦久をいふ。まて貝と云説も云ゐも足らぬ。俗説ゑて。加伎ゑ言便ゐ迦伊といひ。まゐ迦比と誤れるゐゐ。さきゞ直ゐ迦伎廻ゑ。迦伎返ゑ外ゞ云も。少ゑの轉ゑゐ言狀ゐて。是も元も七ゐどもて搔寄ては向ゐ戻し。若干度も然ゑゐゑゐ云るゐらむ。字をゥく。画をかくも。大のゑ筆ゐうひも。已ゞの身ゐ向々て物ゑる故の言とも。こちて此ゐ畫成とゐるも。彼一物の取締ちゞ散ゞ方ゑゐゑ。御弋もて大御身ゖ方ゑ迦伎寄せ集ゑて。一統ゐ凝して。国土と成固ゑ給へる由ゐるべくと云ゐ。○引上も。彼指下し坐る弋を外ゐ。○其弋之末。師云末は佐伎と訓べ

し。下ふ御刀之前。其劔之前ふぞ皆佐伎と云ひ。欽明天皇紀ふ。鉾末。新撰字鏡ふ。欽保己乃佐伎ぞ石のきむれ卍。（因栖等ゞ）大雀命の御刀を見てを処る哥ふ。波加勢流多知。母登都流藝。須恵布由云〻と石のきむ。須恵と訓むも誤ふら祢ぞ。ふれ多き方ふを法べし。○垂落之潮。垂落を。師云斯多陀流と訓法し。書紀の訓も然ふり。はと劔刃垂血ふぞも石の卍。斯多陀流れ斯多を。醴と云ぞ同じ。書紀よも滴瀝之潮。まさ垂落之潮。ふど書れさゆ。○自然を。淤能豆迦良邇ぞ訓法し。ふを自然の意をと卍て。殊ふ補へる文ふゆ。○凝積而ハ。許理都母理氏と訓ゑじ。とは古事記ゐ。累積と見え。御紀。正書ゐを。考牙合せて記せゆ。一書ゐを結而とある卍。○淤能碁呂嶋を。碁を清て。島のゝ殘濁りて。オノコロジマと読むを非れ卍。師云私記ゐ。自凝之嶋也。猶如言自凝也とあ卍。彼許袁呂許袁呂爾かき成給へる潮の滴卍を。積りて成きる故の名ふ卍。卽許袁呂を切れむ許呂ふりさを此島ハ。国土の成れる初ふまきば。地と云名を。泥の聯接て成きを法由りて。都豆比遅れ約まれるふるべし。自と云ふ所以を。他の嶋国を。皆二柱神の生成給へ法ふ。此嶋のみを然らば自然ゐ成きゝ劔ふ卍。故下ふ唯淤能碁呂嶋者。非所生と石の卍。是島を御国の本名として。丈夫島の意ふゆと云は。古語知らぬ者れひゞ言ふり。袁能古の袁を音異ふり。自を淤能の音ふしてをく叶へ卍。後世ふ。自れ仮字ふ袁を用るを誤ふり。其餘も説ども多々れと。皆云ふ足らば。ちて此嶋の在所は下ふ云べし。○天降坐而を。師云阿母理麻志氏と訓法し。万葉二ゐ。和射見我原乃行宮爾安母理座而天下治賜云〻。はと三ふ。天降付天之芳來山。はと十三ふ。葦原

乃水穂之国丹手向爲跡天降座兼云々。また十九了。安母理麻之云々れぞ有ふ依れ已。阿麻久陀理と訓むもいしくはいらば其れ十八よ葦原能美豆保国乎安麻久太利之良志賣之家流ふどもいのまむあり。安母理む阿麻淤理の約已ある古言れ已天下あり抑此二柱大神は高天原よ生坐る神ふむ非れむ今初免て天降坐ふむいらぞ初天神れ大命を承已給ふとして参上已坐ふ降已給ふふ已。然ふその参上已坐しこぞを初ふ云ざふむ其事むさしも要ふけきむ省て語り傳さるふるべし書紀の傳ては天神の大命を承已給ふる事をさふよ省きさるをや或人疑て云く若初ふ高天原ふ参上り給へるぞ降ふ乃ふふらば下文ふも反降と云ふる如く此も反降と云べきよ非ぞや答初ふ参上已坐し時も乃ぞ淤能碁呂島む無き時ふきむ於其島反と云べきよあらぞ。（）衝立は其嶋を已大地中ふ衝立は云べきよあら。

給へふ由ふ已。そは爲国中之御柱と有よて論ふし。（）国中之御柱和名抄ふ柱和名波之良とふの已国中とは大地れ中を云即彼御戈を大地の鎮固れ御柱と爲給ふふふ已是ぞ以て始了。天皇祖神さちの御戈を賜ひて任し給ふることは其をもて大地を攪凝し衝立て固免ふ爲をとれ御量ふ已しおと知られさ已上の御戈を賜へ已し処ふ注る説ども免て唱さゆし前野蘭化と云し人の言として或人の語々らくむ遥西れ国人の世をうちふて測考ふ視て云る説よ此大地の中心は鋏ふて それ謂ゆる北極と云辺已へ張出て大地れ軸とふれる故ふ大地む東西ぞ旋れども南北ふて旋ふこぞれしと所見さり云しと語きり。おれ実ふらば此れ古傳よよくも符ふる説ふゆれ已此御戈を突立坐ふよ依て彼屯くくと漂ふ已し物の一所ふ

凝結びて。眞金と海鹽と和合ひて。土地生ず〳〵。漸くよ締
り堅まりかれ元をり生ありし草は。土地繼ぎ茂り生ず
ず。此國土はこのく大ふ成れる物ふれむ有れ。其れ眞金
物を吸寄る。性ある。土は元より凝集る性ふれど。寄著
れむ然ふこと。潮の鉄を腐る性ふるゞ消りて。
泥とふりて在れば。殊ふ親しく集り。ちて鉄ふ塩の克あ
ひて。はる〳〵土を生し。其ふ因りてまさ益くり。中心ち御
戈れ大地ふ成ず〳〵。弥固まりは堅はりさる物ふること。
予前よ其状を眞似び見て。正しく其趣を試し悟れり。葦
の紙とふきる趣ち。第九十
一段の傳よ注を見るゞし。かくて今普く用ふる鐵をし
も。土ふ生ふ物とれみ思ふは精のら爻。其れ鐵の本は。謂
ゆる鐵砂ふる戈。此れ土り淆りて。何處ふも在る物ふ
ゞ。但し吉備中山を始め。諸國ふ鉄山として。殊よ多ゝる所
もあれど。実れをく見れず。何処ゆい可ども。都ふふき

処とては無し。唯土り混
りて見えざるのみれり。此は如何して在る物ぞと云ふ。
大地れ土は。多く彼御戈れ眞金よりは。殖生き物ふしふ
きむ。自然ふ鐵砂の含はりは有ふり。此説の実を知まれし
き事あり。それ鉄れ錆やれよハ。塩氣の多く含まれる故
ふるゞ。錆の出るれ。やゝて土ふ化る謂れるを。其を本の
鉄よ比ばては。此よれくく多ゝる物ふり。かくて其錆を。を
く揩りをく洗へば。鉄砂あり其を集めて蹈鞴ふ。のくき
む。まさ鉄とふる。然れども其さびれ止まら爻。そは此の
本れ謂ふをりて。交きる塩のいゝふしても。去ざれずふ
り。故まさ腐りて土と化てれ。まさ其土をり鉄砂を出れ
こと。何はでも同じ。凡て鉄よ限ら爻。銅ふども。錆を生じ
て腐るれ。自質ふ塩氣のあれずかし。ちて其銅の青さ
びも。まさ本の銅とふること。鉄ふ異ふら爻。然れず何処
よはれ。自然ふ鉄砂ふ。古ゆは。中心の眞金より。右の諭
しの如く。土を生さる其中より。再鉄砂れ分り出るふる
ふと知るし。然して海辺ふ細砂をうち寄さる状を見ふ
よ。鉄砂れ多ゝの砂より重けれず。砂の下ふ留まる法き

理あるり。其上よのみうち寄らはゝこそ奇しれ。其も砂も白く。鋏砂も黑き故よりをく見分るあり。ちて潮のそぎ扨い。終ふは岩のおよと堅まゞ。其上よ。はさ砂を打上げ。砂の積りてを。まさ其上ふ。鋏砂の浮出て。堅まるおと右ふ同じ。扱其。鋏砂れ固まりさるを。缺取る見るり。板よ鑄さらむ鋏のさびさる狀り異あらば。おも前ふ。下總國海上郡れ海辺を。見遊びれはふ時ふ。熟見てよく覚えさり。斯て其。辺り。謂ゆる荒砥といふ砥石を。切出る所あゞ。其処ハ。今しこそ陵ふあり扨れ。いと古くを。波打寄さる磯ふありし。おと。疑あく見えて。其砥石。やゞて彼。打をせゑはふ細砂の鋏。気と潮とよよりて。堅まれるふぞ有れるそを高き岸れ崩れさる所を見るよ。漸くふ砂の積りさはふ。鋏砂のそれ間ゝふ敷交ゞて。化きる有狀。いち著く。筋入れさらむ様よ見ゆる。を以て。漸くふ國土の大り成れる事の趣を。も知。辨ゞ扨。此も何れの國も。海近き所ふてを誰も見知れる事れ。煩しるべれきど。未見知ざらむ人の為よと。記し出扨。煩しとを。天皇祖神れ。大地作堅免よと。此思を。見過し。てを。

御弋を賜ゞるふ。妙ふる理れくて有免や。大地の中心を

為して。崩れ傾ゝし免ば。一日も無ては有はじき鐵を赤も。然ばゝゞ多ふ生幸ゞ賜ふこと小緣れ事ふは非ゞ加し。まさ是よ就て思ふ由あり。其も磁石と云石の。をく鋏を吸て。南北を指れ物ふるは。此石も。其質を見るふ。鋏の錆れ堅まりて。化れる物と見ゆるふ。然る性を持さるも。鋏の物ををくる性気の凝りて。かゝはふ一種の石と化さる故ゞ。鋏を吸ひ。それ南北を指ことも。彼。御弋れ本末の性気を。自然ふ具ふるふはべし。然思ふは。常の剛鋏を吸なもて。双物を造ゞて。燒双ゞ挂るふ。磁石の如く。鋏を吸しむる為法あり。まさ鋏も。其砂ふる程こそ細よて。本末知ばゝら祢ど。双物はさ釘針れどみ造りても。やゞて本末の出來る物ふり。そも双物よまれ。針釘ふまれ。磁石ふ親しく著く方と。著ざる方のあるふて。曉るべし。煉鍛ひ。煉鍛よ元よさる鋏ふしも。自然ふ本末れ出來ふことを。鋏砂よ元本末ある故よ。煉堅免て。双物針ふぞの類ふる尖れる物ふ造めても。自然よ本末の具ハるふて。最も奇しき物ふりゝし。此は己。思ふ旨ありて。鍛冶。水心子正秀。始免て風炮を造き国友能當ふどふ問祢。みゞゝら試みもし

て知れるあり。然れど磁石のごく北ふ向ふことも謂へる北極の石あり。鉾末れ勢氣れ集り凝れる所ありて。其氣ま引れ向ふと所思さめ。其も彼も大きく此は小けれど。彼方ふ引るぢき理ふ。されば旧説ま。北方ふ鉄塊の張出さる故ま。同氣の相感けて。彼方ふ向ふを云。るも。闇ふ考へさは説れ。當れるまぞ有れる。然れば是。大地の廣く大れる中ま。皇国れ地も。おき国土の元本。はと淤能碁呂嶋も。大地れ鎮固さ。御柱れ地ふれも有れ。故。神代紀ま。便以。礒馭盧島。爲国中之柱。といる傳も有れ。阿波礼古の御柱を。固矢立給もばらまし。ば。大地も更ふり。世ま有る事物の。出來ふむやも。謹ふれふ思ひそ。ちて此嶋我。基れ所として。大八嶋を生給ひ。人種ま生給ひしの。宜しき。皇大御国の地勢れ堅固ふ。人は更ふり。成出る物の。万。国ふ卓越さはおとと。正道ま志し有む人はまお此旨我

熟思ひてよ。此は眞金れ勢氣の。殊ふ勝れて有きはぞかし。然るも。皇国ま成出る鉄れ。殊ま勝きる良ことも。双物の。万。国の。ふ勝りて。利をもて誰も知らむを。中ふ瘡口破る。いと小紀。双物はどは。痛ふく破らはく。故ま。れふ彼。ま勝れ。ま思ふ。痴人も有れど。其。痛ふきおとも。鉄のふはりて在ゲ故ふり。そも顕微鏡ま云ま。も見れば。彼。双物も。双の直ま通り。皇国のも。鋸刃のおと見も。ま。故。瘡口ふど破るふ。痛あるふ。然れど。是。ば。ら。国友能當ふど鍛ひさはは。彼。まいさく勝きり。況て刃物ま。かふ用ふるも。末の事ふて。実の用も。木を伐り。事とありて。人を殺れ料れ物まし有バ。痛しとも。ふでふ事ゥ有。む。其。方は利ま。こそ。良とは爲ふれ。謂も。る南蛮鉄ふど云を。いと良鉄のおと思ふも。ものきど。実ハ皇国の鐵て鉄ふ。等きと打む碎くるを以て知らまさり。剛きも如此く。惡ばハく宜ふ。ふらぬ事も。元ま。ま鉄れ惡ま。ゲ上ま。其。地くの水土。はさ作はは人も何も。皇国ま甚く劣りて。鈍き。外ゲ故ま。刃物も自然ま。鈍ふりれ。ま。斯て皇国れ鉄の勝れ。しの鉄れ劣れる事。ふ。大地の本所と。定矢給へる地ふ。きむ。鉄も更ふり。凡て自然ふ成出る物の精萃きゲ。

久美聚ひ轆轤を以れゆ。ちて人の勝れて強壯あること
も。專此理より因れり。其由た第九段れ傳ふ注を合せ考ふ
ばし。○旧き学者さちの。此段れ事を説て。二柱神天浮橋
より立ったる。会易和合して。動き初る状云へり。瓊戈を指下ゑ
とハ。其会易の動き始めて。国土ふ及ぶを云ひ。会の潤を
玉うさと矛。易れ芽を剱ふ。譬へて。天瓊戈と云ふ。其滴凝
て島ゑあるとた。会の潤。易の芽れ。海水ふ感合して。自ら
国土と化れを。曲言して。瓊戈の滴凝て島と成とた云へ
ひを云ひ。然して皇国の剱れ。万国より勝さる由を。此故事
より係て。日本は天瓊戈れ滴凝て成れる国ふ故う。利剱
その風土う因れり。ふど云り此説の如くは。謂ゆる会易
と云物の。和合し動きて。国土とふるた。皇国より限ふまじ
きを。此故事を曲言と見てた。此理う因て皇国の剱れみ。
利うるべき謂ふし。もし実より。瓊戈れ故事ふ因て。皇国の
剱の勝れさるれらむ。会易の理を曲言ふさるふりと云
ふた非ふり。但し万国より。会易と云物の。感合れきよや。
笑ふべし。凡て旧き学者さちれ。神世れ実より奇霊ふひし
事を。其狹き心う。信ゑること能たれば。凡人の上う合せて。
奇異らぬ趣ふ説むとゑ。故う。かく齟齬ひて。かの首
を隠して。尾を出せる如き説等ぞ多うりは。会易れ理

と云をもて。神典を釈る人くの言ども。皆是よりて佐藤
准へて。その論ふよ足さることを辨ふべし。
信淵考ふ。二柱神れ瓊戈を指下して。迦伎成給ふ時し
も。大地を量宜く修給とくしては。結寄まじ汚物まと甚
く濁れ物のかれひは。御戈の鋒れ神機ふ。悉く攪除き
給ひ。むが。大きくも小ちくも雨霰の如く。大空より分散
めて。遠くも近く母居所を定ゑて。謂ゆる五星を始ゑ。二
十八宿はと衆星と成れるが。大地と共ふ。天日ふ従ひて。
旋る事どそ成ふけむ。五星とハ。水星。金星。火星。木星。土星
是ふり。但し彼混淆れる物の。次く
ふ分散るよ。其質の重きた。輕き物とりも速く分出て愈
重きた。愈早く脱去て。謂ゆる恒天ある二十八宿。まと衆
星とあり。其とり稍晩く分出とるハ。五星ふるべし。○或
人問。五星の中ふ。水星火星ハ。大地とゆも小く見ゆれど。

金星と。大凡大地の量あり。木星土星と。大地をゆも遙ふ大なく。また二十八宿。及衆星と。最高き空ふ憑りさきバ。此をゆ打見るすは。螢火ふして見ゆれど。皆大地をゆも大ふ。然るよそれ悉。大地をゆ分散さる物ぞと云説ハ。如何ぞや所思ゆ。答。そは宇宙の眞理ゆ闇き故よ。さる疑あり。天日の。大地より萠騰れる物ふ。事ハ。古傳ふ昭くさるゆ。其大ふること。大地よ數十倍れ法ふ。ゆ。然れバ星ども。其分出さ法程ふそ。小さくも有れ。某く。ゆ。天皇祖神れ御依し坐て。宰神を定。給ひ。各く其量くゆ。修造し。給ふ物ふ。各く宰神の在ことと。第百二十六段よ。星。神香く背男と云神あり。此を師説よ。金星を宰る神ふ。と解れさるハ然る説よて。衆星ふも。各く宰神あらむ。て二柱神れ。御橋發して攪成ることと。是をもて知べし。

給へ法大空は。北極れ上空ふりれむ。其は樞軸れ。彼處ふ在ふて著明く。殊ふ熟く天象を視法よ。北方ふは星甚多れ。南方ふと。星甚少れを以て察られきと。然れど此考。と。尋常の見。

狹き人くは。心得ゆてふるも多くるべし。阿波礼心ゆ。六合の外よ放ちて。思ひ辨へむ人もゆ。抑世ふは。彼衆星ども。何れ要とも。ゆき物れ。ゆ心得さる族も有れゆ。其成始。ふそ殊更ふ成給ゆ法趣よは見え。此と師説の如く。物毎ふ殊更ゆぬゆ。天皇祖神さちの。產靈よ物ゆ成給ふ御德の趣ふ法。然法と我ゆ皇大御國は。大地れ最初ふ成て。万國れ宗國さるふ。皇美麻命ハ。万國れ大總主よ御坐て。万國ゆ悉所治看ばき道理ふるふゆ。師説ふ精しく著されさる如くゆきゆ。そと伊邪那岐佐之男。神よ。汝命者。所知青海原淳之八百重。焉。と事依し給ひ。其後ゆ。須佐之男。神。青海原淳之八百重の。万國を巡ゆ。ゆ察行し坐て。吾兒。所御之國。不有浮宝。則未住也。と詔給ひて。杉樟ふどを生し給ひ。浮宝よ爲れと定。給ゆるも。船

を出して異国くを従へ給へむ神慮あること灼し。是らの事も師説よいと精しく論れさめ。今しそ蕃人ぞも其義理を得知らばて在き。終ふその道理の顕れて。皇国より卍国司をら頒遣し。外国く戎治を給へむ時ふ。諸蕃は酋等ゞ。貢物奉ると。大洋を渡卍て。朝参せ年より。空れる星を準的とせばては。絶て航を参らばべき術ふし。故是をもて衆星戎も成列祢給ふ。ふぞ有ばる卍。さる天皇祖神さちの。天地を造給へることを。下ふ見さ法師説の如く。青人草を蕃息し給ハむ料ゝて。青人草を愛しみ給ふゞ主ふ故ゝ。六合の中ふ生出る物のゝ卍り。悉く青人草を養育ミ給ふ設より非ざるハ外し。然れども其産霊の御所為ふも。物等悉く。一方よのみを生給ひ難く。そは国地より因て。寒暑よも。強きと弱きと有り。水土よも異あれバ。形状も性味も同ゝら炎。寒地より生るあ卍。熱地より生ゐ卍。故南北相通をし。東西相交るふ非ざれバ。人民の為より宜ゝら炎。是をもて。万国の有無を。互より取遣りて。平均くばるハ。船むゝう卍便宜きを。おく船路の準的をさし教へて。往來を自由ふ安るハ。星より宜きハ無れバ。殊更より造給ふゝハ非ざ免れど。自然よさる益あることも。皆この蒼生を愛しみ給ふ神慮より。阿夜畏卍ゝも。穴卍。事始免給へる御挙ふれぞゝし。

尊卍ゝも。と言卍。此考ふ信て然るばし。○星は成出さ法事ふ付ては。一卍の考へあめ。抑星を。都て自己の光外く。日光を受けて輝あれむ。其質重濁ふる物ふ卍。故考ふ法よ。世は初免。一ッの物大空中ふ生めて。其形状雞子は如しと有るは。皇国も赤縣も天竺も同じ傳ふれむ。此ハ動きれき眞の古説ふめ。扨古の物分判きて。天地と成れる事ハ。大皇国は古傳より明ゝふ見えて。上て詳ふ釋さ法ゞ如し。

かくて此一物の分判せる時ゐ必その卵殻の如きもの破裂ゐて雨雹ゐ如く四方ゐも上下ゐも高く遠く飛散さるゞ日ゐ中央ゐ凝結せゐ時しも其渦旋ゐ健剛ゐる餘勢ゐ受て各くそゐ座位定まゆ猶次くゐ大くも成ゐ循環をゐして今の如くゐは成ゐる物ゐるゐし星ゐ成始ゐ究ゐて此時ゐらむと所思もるゐ但し此を諦ある傳説も無く唯推量ゐ考へゐれど試ゐ云ゐみぞ上ゐ擧さゐ信淵ゐ説と考ゐ合せて見む人宜き方を採るゐし猶星の事を第百廿六段星神ゐ下ま と太昊古暦傳ゐ云ゐ合せ見を

○見立天之御柱

ゐ御柱を上ゐる国之御柱と名は天と国をゐ異れども

も全同じ御柱ゐ其を其戈の小山ゐ化ゐと有を思ふゐし彼御戈は淤能碁呂嶋ゐ衝立て国中之御柱と爲給ゐるゐ小山ゐ化るとは不審ゐ如ゐとゐらばや然れど彼御戈を国土を畫成竟て衝立坐ゐ其鋒ハ国中ゐ御柱とゐ天柄の土ゐ出さる所を八尋殿の眞中乃御柱と爲て其を天之御柱とは云ゐ天ゐ御柱ゐ正書には国之柱と云ひ一書ゐハ天之柱を云て全同物と聞えさ故是をも て爲国中之御柱而見立天之御柱を文を成せり かく云ときを国中の御柱と為さる柱を やゞて天之御柱と見立さる事とゐれぞ外ゐ天之御柱を見立と読むをゐろし

ちて天之とは天ゐる御柱ゐさはゐ立給ゐ故ゐ添て云ゐりと聞も斯て下ゐ此御柱を廻ゐ給ふ事の有を

思ふに。天国に立給へる御柱を。国の中央に立て。天祖神
さちの。其を廻り給ふ故に構ひさめと所思さる。風神の御
名を。天御柱国御柱命と申を。此は国中之御柱とかるに
對ひて。見ばゝらば。風神祇の称へ申に由て。第十段に
傳に委く注べし。凡て此の御柱のこと。師説も委らば。
まさ世の学者あちこち。種く言痛く説作せども。皆論ふも
足らぬ説ども。但し漢土の古書ども。天柱坤軸
ど云こゝ。此の古傳の且く残れるも有る
し。抑大地の国地を外面に付あきば。其御柱を地中に埋
立給ひきど。天の御国を内方に在ゝ下に見あ如く
あれど。其御柱を国の中央に立給ひ当ると。然有ばき事
ふこそ。天御国の内方に在ることを。第百九段に傳に注ふを見べし。さて見立ることを。天に
る御柱に擬ひて立給ひ柱ある故に云る。俗言ふも某

を何と見立る例ど常に云言例る。師説に見て俗言に視
て。是らの見て。只に眼して視るれみを云ひてあらば。
送る見居くふど云見
其事を身に受て。己が任とあて知行ふを云。りさきて此
も此御柱をさ。殿を造るおとに。御親與る所知看に義
あり。と有れど受られ。或説に見立を生立の畧言ふ。
と云るあゝを言ひも足らば。けて天之御柱と見立給ひこゝは。御心
言ひも足らば。
の静まる。と此を行廻て。事始給をむ料ふて。其を。
天皇祖神あちこち御態に效ひ給へる。大禮ある例きに。
言ふも更に。〇八尋殿を。師云。夜比呂杼能と訓べし。之
を添て讀をわろし。書紀に之字を加て書れども。
彼を凡て漢文章を旨とせらきれ
む。かくざはの證ふは依がさし。さ
て和名抄に殿和名止乃とあり。けて此名。不花之佐久
夜毘賣に段に。作無戸八尋殿云く。神代紀に。於秀起

浪穂之上に起八尋殿而云くあどゐの已。まさ履中天皇紀、山城風土記あどゐ、八尋屋と云も有り、倭姫命世記に八尋八。殿の廣さ此度を云も、八尋機屋ぞ云も見えたり。

云るゐて。八は必しも七八と數る八には非ず。彌の約まゐ已ある言れ已。凡て八重八雲。まさ八十。八百。八千。其外八某と云古と古の常ゐ已。皆同じ古とゐて。唯重ゐ已多紀を云已。然るを神道には、八數を等むゐど云て、此數に就て種く云ゐ沢も、皆例の漢書言よて、都て古の意ゐゐら岩物を八よ齊ふるも、後の態ゐ已。尋に兩手を伸ある長さ我云。今人も。然して一尋と定るれ已。其に手を廣げて度る故に。一廣げ二廣ぐの意ゐ沢ば法し。漢国ゐても、舒肘知尋ゐどゐの尺と定めし。稍後のこぞゐらむ。御国ゐは、今も猶八尺を云ば。況て神代に思ひやるば法し。且八尋示と云も有を

以て、八八六丈四尺。ゐゐらぬを悟べし。ちて先此殿を見立賜は。女男共ゐ住て。御合し賜む料ゐ已。そもく其殿立賜こぞまでは。云ども有ぬべきを。先如此云は。古妻問妄るゐは。先其屋を建しおとく見えて。須佐之男命の須賀の宮作も。都麻碁微爾夜幣賀伎都久流と詠ゑくをみれば。專妻を籠居む爲ゐることぞ知られ。はゐと万葉三ゐ。勝鹿の眞間娘子ぐ墓を見て。赤人歌ゐ。古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻問爲家牟云く。是に契冲まさ師の考に異ゐれど。此ゐ由ゐる事とも思はゐく故に引於人好む方を取れ。是も古賤者も。廬屋を立て妻問ひといふ。云ゐらはし此有故よかく續けて詠已と見も。斯在で此の

八尋殿も徒ふ云るふは非ず由なふ古ものぞ。故書紀はた同宮共住而生兒ともなるをや。○化作天之御柱を見立と書るは古事記ふ書ゐはく化作の化作を神代紀ふ依れ也。同語ふかく字を別ふせる由を彼は訓を知也。此を言義を知し免むと此態ふ也。神代紀ふかく書れさる意を按ふ。是時いまだ樹は無也しらば神の御所爲ふて化作賜へると云意をもて書れ志事と所思れば也。師言ふ。書紀ふ化作化竪ふど書れさる化字えいと心得安。決免て此字の意を非ず。訓を古事記ふ依まるれり。と言れさる。訓れふとはさる言ふれど化字を書れし意を思ひ得らきざめれ也。しかて其化作給ふ事を云古ものぞ。今知ばきふ非ざれども後世ふも思合べき神態

ふむ多ゐる。其を淳和天皇紀天長九年五月の處ふ伊豆国賀茂郡ふ坐ば伊古奈比咩神の古ものを此神塞深谷摧高巖平造之地二十町許作神宮二院池三處神異之事不可勝計と見え。仁明天皇紀承和七年九月の處ふ同国上津嶋ふ坐ば阿波神の。新ふ神宮四院。石屋二間屋二間闇室八基を化作給へる事を記せる文中ふ東南角有新造院周垣二重以堅築固各高二許丈廣一許丈南面有二門。其中央有一龍周六百許丈高五百許丈其南片岸有闇室八基南面四基西面四基周各二十許丈高十二許丈其上階東有屋一基瓮玉瓦形葺造之長十許丈廣四許丈高六

許文其壁以白石立周則南面有一戸其西方有一屋以黑
瓦葺作之其壁塗赤土東面有一戸院裏礫砂皆悉金色云
云此よは唯一院の有状を其侭ふ記せり猶三院れと
も文おとよ長々れど記し出ぶ凡て目を驚うせる事
ども れ ど去承和五年七月五日夜出火上津嶋左右海中燒炎
如野火十二童子相接取炬下海附火諸童子履潮如地入
地如水震上大石以火燒摧炎煬逢天其狀朦朧所々燄飛
其間經旬云々とあり此事委曲くて第百三十一段了此
全文を引て其処ふ神さちの御名の出さる処の傳ふ
注安城見るぶし はさ清和天皇紀ふ貞觀七年十二月
れ處ふ駿河國淺間明神の神宮を化作坐るおとを記し
て富士大山西峯忽有熾火燒碎巖谷云く仰而見之正中

最頂餝造社宮垣有四隅以丹青石立其四面石高一丈八
尺許廣三尺厚一尺餘立石之門相去一尺中有一重高閣
以石搆營彩色美麗不可勝言云々と見也阿夜可畏これ
国史了數多見えさるを當時此事ども記し傳冥給へ
る御世の博士等のいふ心得て有々るふやちしも驚
き畏免る趣ふれ記されぎまさ世々の学者ども
る事をむ殊よも記し出て神の御稜威れ畏き謂を人ふ
も諭べき事ふるふ然る人れ世々ろ一人も聞えざる
む皆由緒もれお漢神立須久美ふどれ說よ惑ひて神の
御上をむ等閑ふ思ひ過して心をむ留ざる故ふ抑漢
神佛ども れど いふ神僭ひ喧ぐとも いさ うの眞似
びとそべき斯むかの態ま祢びりも得爲免やも然
る事由をば思はべて新物好ふ蕃神らを上ふき物よ齋
々ゑ故ふ然しも御稜威速き神さちの漸くよ御稜威を
隱して坐くぬどと人とも遠く成ゑ乃ひ今しもかる
御態どもの古書ふ傳はれるを見ても異むの畏々れぞ
みふらべ徒了見過安とふも成りける

此神あちは。此の二柱神あちを。末とも末れ神等ゐ。
ゐ。其神威かくれ如し。然きば此て化作八尋殿とゐるを。
右れ神等の御態ゐ準ゑて。其趣を想像奉る法し。まと右ゐ引く
神態どもゐをゆゑ。其本ゐ御祖神さちの。天地れ初発を
成坐る趣。まさ万の事を始給へる事れ趣を想ひ奉るゐ。
此神代巻ゐ撰ひ記せる事迹どもを。其奇霊ゐるゐ。
神態の。千万ゲ中の一ッすも足らじをぞおゐもる。ちを此
殿は。何様ゐ化作給へりと云こと。是はと今知法らぬ
事れ如くゐきぎ。後ゐ神宮を造るゐ。まゐ心御柱と申に
を立て。四方ゐ造るは。神世の宮作の狀を傳へゐる擧と
聞もれど。彼天之御柱を中央ゐ取ゐて。八尋四方ゐ化竪
給ひ入むこと。次ゐ其御柱を行廻ゐ給ふ事れ有ゐて想

像らきと。其はと天皇祖神の宮造ゐ擬ひて。造給ゐむ
を言も更ゐ。ゐ次ゐ。御柱を廻給ふ処ゐも注ゐを見るべし。○共住給矣。ゐを
文れゐ〳〵ゐ見ても有法れれど。古紀物語書どもゐ。男女
親び語らひて。女れ許ゐ男の通ひて居こをを須年と云
しを思ふゐ。此も其意ゐて。此殿を妻籠の料ゐ立給ゐる
れきど。女神ぞ主ゐる理ゐる故ゐ。男神れ共ゐ住給へを
と云意ゐ見ゐべし。○故其瓊戈と云をを以下を。二柱神
の當時れゐとを云ゐゐを非ば。此神あちれ御世過て。遙
ゐ後世ゐ。如此有しゐとを語を傳さる文ゐを。後者の字を加さる
を。ゐれ故ぞゐし。ちて此ゐ瓊戈とゐるは。即上ゐ謂もる天之御

柱を云。そは天之御柱と云名も殿の中央に柱と爲給へ
る故以て稱へる名なれぞ。實は彼瓊戈なる故ふ。此ゐは。
かく云るれア。○化小山矣とも。此二柱神の御世過て後
世ふ。かの天之御柱と見立給ふる瓊戈も。淡能碁呂嶋ふ
立さ成まゝふ。小山ふ化れる由なア。其は美濃國の喪山
を初め。神世の物も後ゑ山と化り。石と化きる類もいを
多ゑア。出雲風土記ふも。宇比多伎山。大神之御屋也。まと
桙山。大神之御桙也など數多見えあア。大神とも。大國主神を申せるれゐ。
ちて此淡能碁呂嶋の在所はおと。忌部正通口訣ゐ。磯馭
盧嶋自凝嶋也。在淡路西北隅。小嶋也とゐア。是正說なア。

其も仁德天皇に。淡路嶋ふ大坐ほしてに大御歌ふ。阿波
志麻。淡能碁呂志麻。阿遲麻佐能志麻母美由。云くゆあれ
ど。淡嶋と竝びて。淡路嶋の西北ふ當れア。淡島のおとも。次段ゑ委く云
ひ。桙榔島のおとも。仁德天皇卷ふ注を見べし。大神貫道と云し人に。此嶋ふ詣
で見て記せる物ふ。淡路洲の西北に隅ふ在て。俗ゑ胞嶋
と呼もの是なア。とも神代紀ゑ。以磯馭盧島爲胞と云へる文ゑとアて。唱やゝき故ゐかくも呼ふ
なア。はゑ淡能碁呂嶋てふ名も存れゆ。此嶋ふ圓く玉に如
く湧出さる石。幾千と云數を知らゞ。其形を見ほふ。表は
金氣をもて包み。裏ふ土砂を含ゆア。是も瓊戈に滴ア分
散りて凝さる物なア。今云。古も瀝の散て化れるゐは有
ばゐらば。彼御戈もとをア金氣ゐ

る玉の質あるべけまぢ。其外ふ産鹽まと釜杓子ふど云然た化れ物れるぢし。
具の形ぞ自然の石ふ現れ。嶋は風景樹木は葉色岩の滑澤ある狀ふど。畫ふも書ふも著しがあし。まと下は漢文は所ヲハ。
島中、奇石磊落多、現ニ男根女陰之狀、奇形怪狀不可勝數矣。又金玉之精湧出、其形如露、似珠、表発金気、裏含土砂矣云云とも記せり。
さて其地方ふ。鶺鴒嶋と云ふ。はと其邊ふ式ある石屋、神社ふ。今た磐樟社ぞ云ふ。岩窟の内ふ。二柱大神ふ。蛭子を合せ祭る。其東南方は山ふ。天地大神宮と云あり。
國常立尊。伊弉諾尊。伊弉冉尊三座ふ。其攝社ふ。八十万神ふ。今云、石屋、神社た、神名式ヲ、淡路、國津名、郡九座とあるゞ中の一社あり。永万記ふ石屋、社と出さゆ。度會延經の考證ヲ、今在石屋村ニ称天地明神ニ社相並、亦海辺、石窟中ニ有小社と云るふ依れば。天地大明

神と申た。やがて石屋、神社ヲて、磐樟、社と云は、其本社の在し所あるべし。さて天地明神た、國常立、尊と、二柱、大神と、あれぞ、此た日本紀ヲ依て、後人の説あるぢし。もし実ふ三座ふらば、産巣日、大神をこそ祭るべゝき。凡て社〻ヲ、國常立、尊を祭れりと云ふとの聞もるた。皆後人の日本紀ふ依れる漫説ふぞ有ゝ。はと南ふ大和嶋と云あり。所人ふ問ふ。昔ゝ魔所ふありと云傳へ。恐れて登る人ふ。如由いへゆ。と見も。信ふふきぞ瓊戈は化ぢ。はふ山ふ。ゆべき。今は淡路、國津名、郡ふ屬りぞ聞も。鶺鴒島、大和島、淡能碁呂島、今はいさゝ海ヲて隔、とゆと聞もれども。いと古くた一聯の島ふりゝむとおぞも。然れど魔所れぞ云て恐るゝふとハ。是島ふ神くしき事どもの有ゝ。俗人の常れきぞ。然も言ふべきふとよこそ。然るを釋紀ふ引と。はふ私記ふ。在淡路嶋、西南角小嶋是也云。俗猶存其名也。或説今在淡路、國、東由良、驛、下と云ひ。西南た下

て引く文は坤方小島とある是あり故未申と訓ぜ由良駅も下ふ引く文ふ由理駅とある是あり然れど私記は四の異説あるが如くまと或説云とて淡路紀伊国兩国にて実も一説あり

之堺由理驛之西方小嶋云く然而彼淡路坤方小嶋于今得此號也とあるを始め説ども多有ど皆かの大御歌ふ叶ざれど採用のさし

まさ纂疏ふ舊説曰として和州之宝山也云江州之叡山也あども見さきど是らも僧原の云出さる説どもて凡て論ふは足らぬまさ淡路国人仲野安雄や云しが常磐草てふ誌を著せるは私記ふる在淡路島西南角と云る説と由理駅之西方小島云と云説を一ふして彼国の南方ふある沼島と云をこを沼島の省とさる名て是ありと云へり此島も万葉三巻ふ人麿哥ふ珠藻苅る敏馬を過て夏草の野島が埼は舟近著ぬと詠る島ふて其辺て上立神と高さ十四丈ばかり直は立て柱の如きと下立神や高ち六丈ばかり柱の如く立ある有り其外ふも奇しき事ども有る由ふれど上の大御哥ふ合ざれど信ずあく且小山て化きりと有ふも叶ぬ此島も由良駅の下五里許西ふ在て木国て近く民屋千軒許もあり

とて大ある島ふりとぞ然れど私記ふる説どもも凡て彼大御哥ふ淡島や並べて御製坐るふ叶ざれど拠がさし其も淡島も次段は注せる師説の如く淡路の西北は在るふ疑ふけまぞれり大神氏私記は西南を西北の誤あらむと云へり此むさもあるばし

○或人問云胞島を於能碁呂島とは

ては疑ふめり其故も前ふ大地の中極は柱を此嶋をとは衝立給ふる由云へる説は如くは其地北極は處ふ在ばき理ふあり淡路国邊ハ北極をとは五十五度ばかりとは南方は寄されど彼嶋を大地の樞軸は所とは言難ぬを如何答

ふは信淵説ふ二柱神は御橋發して畫成給ふ大空は北極の上空れとしこや樞極の彼處ふ在て著明ふ

よ。其御戈を衝立給へる嶋は。然ばゝ也放きる在ことを。彼御戈の心をば。大地の中心と爲給ふる。玉を飾きる柄は。嶋面ゝ樹さるを。八尋殿は中央の御柱と爲給ひ。大地の漸〳〵ゝ凝結び。漸〳〵ゝ大ゝ成れ也しかば。大八島嶋生むと爲給ふ時ゝ。寒暖の度宜き所を撰びて。国引ゝ引寄せ來はして。今は所ゝ置居て。此嶋は基と爲て。次〳〵ゝ大八嶋国をば。産成給ふる也。国引給ふを云こと。異し〳〵思ふ人も有ゝむゝ。此も八束水臣津奴命の。韓国の地を引來て。出雲国ゝ縫付給ふる故事を思ふべし。古史は第七十六段ゝ出さめ。ちて皇国の在所は。大地図どもゝ見えさる如く。大地の額と云べき所ゝ。赤道ゝ北ゝ三十度。四十度は間ゝ。是大地界中ゝ。最勝さる所ゝ。故ゝ此所ゝ定給ふは。大神貫道ゝ磯馭盧嶋記

ゝ。旁無延縁。自溟海崛然而獨立。根無連著。隨潮波上下而。自在是故大地雖震。敢不動。高浪蹴天。奚可浸乎。と云へる如く。己も殊ゝ往て見さるゝ。實ゝも浮島ゝるべく所思さ也。凡て浮島のことも。師の委き考あり。然れども此等は說は。腹ゝ一天地ある人ゝらゑえ。其闇奥を伺ひ得むことと。亘ゝ。其はとはを。彼御戈は。北極の處〻也埋まる。中心を成て。其埋めさゝ本所は。樞軸と成れゝ。是ゝ依て大地はゝの畫成坐る。御手は運のまゝ〳〵旋りて。十二時は間ゝ一轉ゝて。晝夜を別し。終古ゝ違ゝることゝ。今は現ゝ見ゝ如し。然れば淤能碁呂嶋は。御戈を衝立給ふる往昔は。北極は所ゝ在しゝど。後ゝは今は所ゝ移れゝ

卫。大地の固まり成れる。正り彼、御戈れ鋺気より資こと
あれば。其気大地り充満て。何きの地よも此物多く。人
れ用と為こと。二柱神の。地軸と爲給ふる。御恩頼ふよ
る事れ。言もて行々ば。天皇祖神さちれ。産霊の御徳より因
ふ。云も更ふり。是より就ても。皇国の古傳れ令き
事を。見と〳〵一も。眞理ふ叶れ。災ても。異議ふべき事れあ
るり。異国より。某々より。天地初發れ傳の。少ばく。遺り
れど。皇国の如く。正しき古傳の。一も有りは。蠢々き蕃
説より。惑ひさらむ人く。熟思ひてよ。御
国の古事学り。万学の基原ふる物ぞ。ちて大地れ。十二時
ふ。一轉去る神機は。小運ふて。二柱神れ。神功ふ資れる旋
ふるゞ。天日れ旋動より従ひる。其を一周去ふを。大地れ大
運と云ふ。唯大地のみふらば。五星を始め衆星も。皆その
旋動ふ従ず。是天日れ御国ふ神留坐し神の。天之御柱を
立給ふる其霊機ふ資こと。上り師の説れさるゞ如し。但し

初学れ人の爲り。其旋る日時の大約を云はゞ。まず日れ
六合の中央より在て。居ふゞら西をり東へ。常ふ一旋して。
瞬く間も断と無く。此勢より製れて。六合より在り由る物。大
空気を始め衆星も。何も。旋風の吹旋らし如く。西をり東
へ。終古より運行を違へず。然れども。日旋を離ることの
遠きふ従ひ。旋行の勢ひ。漸くより緩くふりて。恒星二十八
宿等の在所より。外よりてり。日を距と極遠れず。
殆と動ふ。紀ゞ如し。それ五星及び列宿の。各自れ運歩を
測量り見ず。直より其実徴は知らるべし。先日の旋りれ。大
地の二十五日半り一旋去るを。水星ハ。第一郭より在て。日
より最近々れど。日れ運より遅くして。大約八十八日不足
り。其郭を。西を卫東ふ一周し。其次れ金星ふり。日の第
二郭より在て。二百二十四日半餘より一周し。其次ハ大地
ふり。日の第三郭り在て。三百六十五日三時ゟどより一
周し。是を一年といふ。其間ふ北り浮み昇りて冬をふし。
南より降りて夏をふし。寒暑の往來あ卫。万物れ生ず。
成ことは。伊邪那岐。伊邪那美二柱神れ。国中より御柱を衝
立て。固給へる。御恩頼より資ことれ。云も更ふり。大地の次
ふ在て。六百八十七日不足より
一周し。其次れ木星ふり。日の第四郭より在て。四千三百三

十二日半ばとして一周に十二年ばかり少し羸し其次ハ土星なり日の第六郭ハ在て大約一万七百五十九日餘ふて一周に二十九年半ばかり是皆日輪の運轉る勢ハ割れ從ひて運るる故ふ愈近きハ愈早く愈遠きハいよ〳〵遲く運ふこと是を以て曉るべし是即天日の御柱を立給ふる神機ふぞ因れりゝ扨この土星より外ハ日を距ること甚遠々きぞ旋轉の勢漸くに衰へて列星ハ在る恒天ハ至りては大約一万八千年ばかを經ざれぞ一周せ麼右の諸星の運行ハ遲速交會れぞのあるを審ふ測量り定むるを曆數術とハ云ふり又土星より列宿の在所までの間ハいと〳〵遠々れぞ五星の外ハ百年二百年或ハ五百年千年餘ハて一周に成る星ハ幾百千ゝ有むも知ぬらぬ然れぞ其を推ふ知らむと欲ふる人の掛ても習ふ言ふ此も然る說ふ外ハ俊傑ふる人の所爲ふしあれぞふまじ妃事ふ也々り

次くふも注ふを見るぬし○此後ふ赤縣州の古傳を考ふ依ふ天皇氏を云神の世界を修造ふ五嶽を植ふと

云事ハあるぬ思ふり小緣の事ハ非ぞ聞ふるぬ是ふ依れぞ淤能碁呂嶋ハみハ非ぞ大地の鎭固ふ依ふ固き御柱を四方ふも立給へふと所思るふ此事ハ殊ハ委く考へて赤縣太古傳の天柱五岳餘論ふ記せるを見て知べし實や天地をハ造ふ作ふ給ふ大神等ハ御所業ふれぞいを〳〵奇靈れる事ハ多かふりむ古を能く思ひ辨ふぬし

於是伊邪那岐命於其妹伊邪那美命問曰汝身者如何成則

答云吾身者成成而不成合處
一處在矣。伊邪那岐命詔曰出。
我身者成成而。成餘出處一處
在。故以此吾身出成餘出處。刺
塞汝身出不成合處而。以爲生
成國土奈何詔出則。伊邪那美
命答曰然善矣。爾伊邪那岐命。
然則吾與汝。行廻逢是天出御
柱而。爲美斗能麻具波比詔出。
如此云期而。乃詔曰汝者自左

迴逢吾者自右迴逢約竟迴坐
而會一面出時伊邪那美命先
唱曰阿那邇夜志愛袁登古袁
後伊邪那岐命和曰阿那邇夜
志愛袁登賣袁矣各言竟而後
伊邪那岐命不悅給而告其妹
曰吾者男在則當先唱理也如
何女人先言不良矣雖然於久
美度興而御合坐時不知看其
術爾鶺鴒飛來搖其首尾二柱

神見行而學出得交道而先生給子蛭子矣此子者雖滿三歲脚尚不立故入葦船而順流放棄出次生給淡嶋矣是亦不入子出例也

於是乍上の化作八尋殿而共住給矣此文を受さ已○汝身は師云那賀美と訓べし汝乍上代の歌どもふも多く那と訓み此字常ふ漢文ふては那牟遅と訓ミ古書ヲは伊麻斯と訓さ已是らも惡しきふ乍非ゆど

まさ那兄那泥汝妹那禮吾を吾礼己を己礼と云ふ如く汝を汝礼也云ふ汝者

允恭天皇紀ふ見ゆ汝命ふども皆那を本とおさる稱ゆきば汝乍那と云ぞ本ゆ已れ流穴牟遅も那を本として牟遅は大乍牟遅ふどの牟遅ふり物語文ふ

乍伎牟遅と云称も有さて又是を伊麻斯と云るは万葉乍伎乍君の意ふり

十一了伊麻思毛吾毛事應成まさ十四ふ伊麻思乎多能美云く高野天皇紀の大命ふ先帝乃御命以天朕仁勅之久天下方朕子伊末之仁授給云く是等ゆ已ふ不續紀ゆ

宜命どもゐ。美麻斯とも云ひ。万葉十四。まさ後物語あど
美麻斯は。御座の義にて。守みさるゐ。麻之とも云ひ。○今按ふ
称ゐるを。伊麻斯とも轉れるよや。ちて那も伊麻斯も。後
ふは下方の人よれみ言ゐども。いを上代ふは然らば。其
本は尊む人ふも云ふ稱ゐ。汝字を當しを思へば。其頃
は云ざひしよや。漢ふても上古は。爾汝ゐど云称ゐ。上下
の別ちは無ひしりどを。御囲ゐ文字の渡り参出來し頃
は後ふれば然らば。己ゐ夫を汝を云ふゐと。沼河比賣命の歌。まさ
須勢理毘賣命は歌等ふ見え。建内宿禰の歌ふは。天皇は
しも那賀美古と申せひ。汝之御子ゐり。まさ某之を云を某賀と
云母後ゐは賤む方ふ取ど。上代ふは是も上下別無辭ふ
て。之を云ふ同じ。○如何成は師云。伊迦爾那禮流と訓法

し。女神の大御身は成整ひさる形狀を。如何ゐるぞと。男
神は問賜ふれひ。○成くとは。師云。初生そ欠しをひ漸く
よ成て。成畢きる状云ふひ。書紀ふ具成而と書るゲ如し。戀く而行く而
れどは格の言ふひ。○不成合處とは。師云缺て滿ぬ如
くふ處を詔ゐり。即御番登ふひ。○詔曰之は。本ふ詔字
はみれひし状師の能理多麻比都良久と訓て。續紀の詔
ふ。詔賜都良久云くまさ勅豆良久云く止宣賜志ふど有
を引れゐるふ依ひ。古事記の文法ふ效ひて文を成せひ。
都良久と云る例は。古事記ふ。須佐之男命の御言よも。白都良久とはひ。ちて詔之則は。此も
本ふ無を。師說よ此所の御言は終よ。登詔賜者と云こを

ヌ再讀添べし。是も彼大命どもゝ依れ卍。古語の格ゝ卍。と言れしゝ據て文を成せめ。下皆是ゝ倣ふばし。凡て此等の事ども。記傳訓法條を見て知べし。○成餘之處とは。師說ゝぬくれ出て。身ヒ外ゝ贅れるゞ如ゝ成詔ヲ卍。と言れゝ成ゝ如ゝ。神代紀ゝは。不成合處を。一雌元之處。また稱陰元者一處とも書れ。成餘之處を。一雄元之處。はゝ稱陽元者一處とも有きゞ。ゝハ例の漢文ゝれゞ。いろゞれ卍。古事記ゝ依て。其實をば知べきゝめ。けて此の御問答の趣を熟く思ふ。も。國土ヲ成坐ゝ上ゝ云る如く。此二柱神ぞ初ゝゝゝこと。疑ゝく所思ゆる。其もし實ゝ宇比地邇須比智邇神を卍。淤母陀琉訶志古泥神まで。四代ヒ神等の御在むゝは。其御世ヒゝど幾千歲をゝ經ゝむ。

其間ゝ男女ヒ形の。何ゝ變れる物ぞと云ゝを。次くゝ所知看さで在べきゝは。今かく新ゝ御問答し坐る趣を。愼み畏ミ想奉るゝ。男神の御身ヒ漸くゝ成く坐ゝ見行ゝれゞ。成餘れ有處一所あ卍。八握の御須も生給ひむを。女神ゝヒ御須もおはし坐ゝ。手弱ゝゝ坐ゝど。御自身とは甚く異きる御形狀ゝるゝ。不審く所思坐て。御問坐るゝ有ばし。互ゝ吾身者成く而云くと詔賜へる大御語ゝ。潭く心をひそ免て想像奉るばし。穴賢しや。さて成餘之處不成合處とばゝ卍。名の無ゝ。最もいとも尊く感とき古傳の神語ゝりゝき。然るゝ神代紀ゝ。陰元陽元ゝど有ヒ。强て名けられゝる物ゝり。此時ゝヒ。未名の無りしゝは云も更ゝり。男女ともゝ會處は名の出來て後

も。其名をば言ざりしあと。第十九段。汝已見我情云々とある処の傳ふ。委く注を見るべし。○刺て師云。挿入るなり。塞ふ屬處袁の袁ふ當て讀べし。○塞は。師云。布多岐と訓ばし。和名抄よ。或以開字為男陰と云こと。○国土て。前ふ思ふ旨なるる。此ふいさゝ由有げあり。

とる輕き辭よはならば。

卍て。久邇都智と訓しゝど。今をく思ふば師の久邇と訓べし。下よ国土皆震をあるなぞは。久迩都知と訓ばれど。まと訶志比宮段よ。不見国土とあるなぞて。久迩とのみ訓ばれれざふ。其さまふをるばし。をこ云きとはよ従ふべし。○生成は。師云唯生こをふ卍。其を成をも添て詔ふて竹取物語ふ。已ゞ成ぬ子ふれど。心ゝも從ふばと見え。うおぞ物語藤原君巻ふ。此春子一人ふして隱れましふ卍をふ有卍。おれら生

を那須と云卍。今世ふも。まく親子を成ぬ中と云り。はと大祓詞ふ。国中爾成出武天之益人等と云るも。生出はを云卍。○以爲て。於母布波と訓べし。本ては為字のみふて。師て言れとる説もふのまど。今て眞福寺本ふ以爲とある。ふ依れ卍。邇く藝命て佐久夜毘賣ふ。吾欲目合汝者奈何と。詔牙るとと語も意もをく似と卍。○奈何て師言て如く。伊加爾をを訓ばし。語の終ふかく奈何と云ふと。古事記中ふも例ある卍。まと万葉十六ゝ。隱耳恋者辛苦山葉從出來月之顯者如何とあり。おれ此と語勢をく似とめ。ちて今しも始めて。女神の御身て成くれる有状を問ふろし看て。其成合ざる處ゝ。己命の御身て成餘れる處を挿塞ぎて。国生成まく所思し著坐るは。是ぞ天皇祖神の賦

賜へば産靈比御德の顯れ給ふにて。奇とも妙ふべ
とも。拙き言語ふ。挂まくは畏紀事の極ふるを。今その由
を申し顯さむよ。此れかの大空ふ生出る。其狀いひ難の
ぴける一物の。彼れ萌上りて。天日とふまきる。其跡の。女会比狀ふて在れば
ま。其中ふ彼瓊戈を挿入れ攪成給へるよ。其末をぴ垂落
る潮自然凝積りて。淤能碁呂嶋の成出しを甚奇しと見
行せるふ。男神比御身ふ成餘りて。彼御戈の形ふせば物
あり。女神の御身よ成合ぐて其狀言がと紀物ふ似とる
所ぴぴ。故是をもて忽然て。それ成合ざば處よ。成餘れる
處を挿塞紀て。国生成むとは所思看ぢき給へるふぴ。然
る

紀是をゆ前よ。此態のろぢて無ぴしふと。云も更ふれむ。
斯の如よ態を行ひて。子を生む物を云こをむ。是まさ都
よ聞知り給はざる事ふるふ。頓ふかくしも所思看し著
さ万へる事む。産巣日大神の御靈よ因らでむ。ねるはじ
紀事。心を平ふし
て熟く思ふべし。故ふ比御故事を深く思ふよ。此態ハふ
も。人比爲ぢき業比多ろば中ふ。最もやふと無きわざの。
假初の戯事比如く。慢ふ行ふぢき態ふむ非ぢ。皇産靈大
神比大御心を心とし。生子を蕃息しむる。最も重紀態
ふる事をし常ふ思ひる。忘ぢらぬ事ふざぴれば。ふわ此事
む。年頃深く考て。殊よ委き說あれど。此ふ云。
むむ中くふ畏れむ。別ふ記せる物ぞも有り。○然善ハ。
斯訶延祁年と訓ぢし。師む余祁年と訓れさきど。延祁年と云ろさ語古し。此む師
言比如く。男神の詔て事を。諾ひる御答ふぴ。然は。吾

も然思と云意ふて。然也と云むゞ如し。然也を。然とばゝ
物語ふぎよも多ゝゆ。まと志詞理と云む。然有の約はりとる語あり。善と一ゝ好ゞきむ語ふ
むてらゞ讀切る心ばゞふ有ばし。延祁年ハ善加良年と
云ふ同じ古語ふゞ。天智天皇紀の童謠ふ。多拖尼之曳鷄
武とてゝる。曳は善れゆ。同時の哥ふ。御吉野を美曳之努と有ふて知べし。万葉ふど
ふも多ゝゞ。○是天之御柱とは。前ふ見立天之御柱とて
る御柱ふゆ。是とてゝるゝて。おの於實む天瓊戈を大地の
ゝらふ然聞えとり。
鎮固ふ衝立給ゞる其柄ふる城。天日む御国の御柱ふ擬
へて。八尋殿の中央む柱と爲給へきば。此ゝは直ふ。天之
御柱と詔ゞゞ。○行廻逢而む由伎米具理阿比氐と訓ば

し。師説ふ此を分て解ば。行む。左右ゞ分れて行歩ふゞ。廻
む御柱を廻ふゞ逢む前ふて行會ふゞ。佛足石贊歌ふ。由
伎米具利。万葉十七ふ伊由伎米具禮流ふどてゝゞ。さて行を。古の
哥ふむ多く発語を置て。伊由伎とを免れず。此も然訓べ
きゝともおゞしれまど。哥こそてゝき。ゝゞの詞ふ。然云る
例あけれむ。然む訓ばゝら。凡て哥と文とけぢ免有
ことを能考ふべし。凡てとのゝぐゝ。今人む辨へふくみ
ざりゝゞ。凡そ夫婦遘合の初ふ。先柱を行廻ことと。上代の大禮
と見えゝゞ。此む其男女遘合の始ふして。先此禮を行ひ
給ふゝとむ甚く深き謂有ゝとゝるばし。後世まで神の
御殿造奉ゝふ。其中央ふ心御柱を云を建て。殊ふ齋ひか
しゝゝく。其説どもゝそ。後人む設ゝる言ふれ。然ばゝる事

は上代を正れ傳へるなり。心御柱てふ称も後のおとろ。中心の意よりて中央ふ立故の名おらむ。是を若上代を正の名おらば心も人心れおとろ取成て説るも例れ妄言おり。はと今人れ屋ふも中央の柱を大黒柱と云て重くれ尤る。大黒の称も後世人れ漢籍ふる大極てふ語を正云出しちかしら言おらむ。名おそ信られ祢。是も神代を正夫婦れかあらしれ始て廻る柱ふる故て重く崇へけ法上代をゆの傳も正事の遺れる外法べれき婆ふ正。上古も貴き賤ま差おそ石れ神宮人家とて造りざま変れるおとふし今の古神宮作も郎上代の人れ家のさはあり雄畧天皇れ御世ま志幾大縣主ゞ舎ふ堅魚木を上て作れ正し事ふど思ひ合安べし。されむ後世の心御柱と大黒柱とも本は一物ふる法く思る伊勢神宮れ記等ふ心御柱の一名を天之御柱と云るは此の故事をり自り傳も正しおとろ若おらむ多れ中ふも行廻給ひし柱多殊ま天之御柱と負せて傳へしふらむ。されど後人の引合せて云るも知難し。彼れ此まれ此まれひゞおとろは非じ。偖まと思ふて柱といふ名義も波斯も間ふるべし。今云良も添りと間を波斯と云例多し。間人まと万葉歌ふ相競端爾と云へるも端も借字ふて間ふの意れ正。まと木よもいらに草よもあら然らふりと云哥も竹を木竹のもれ波斯ふ吾身もふりぬべと草をれ間と云るふり。かくて柱も屋を地との間ふ立る物ふをばふ正。はと橋も同意ろ。此岸と彼岸をれ間よ渡せば外正。まと今俗言ふ妻どひの最初ふ言を通もしそむる媒を波斯加気と云も橋懸の意ふて。右の柱れ事ふもおれ於ら通へり。まと箸と云名も此物も必二於相對ひと正合て其用を外安物ふをば夫婦の意ふ似と正。はゑ事れ初を端といふも此の御柱廻正れ事よ由石めと

言れしは然る説ながら。中ゐ御柱廻巴れおと殘。凡人れ如何とも測知べ圦ゐ非ぞと云ひ。廻給ふる柱の事をも。其中央の柱ゐぞ有々むゑ。あど〳〵しげゐ言れ扨るは。猶委らぐ。されむ試ゐ強てとて言れし説も。當まりとれ聞えぎゐむ。其れ前段ゐ委曲く註せる如く。此は天日れ御国ゐる中極の御柱ゐ擬ひて。立給ふ柱ゐる故ゐ。天之御柱と名け給へるおと疑ゐき城。此ゐ其を廻る御禮を行ひ給ふるは。天御国ゐる御柱を。天皇祖神さちの廻坐て六合の旋轉る神機の樞軸と成給へ為御態れ有しゐ。習ひ坐る大禮ゐるこゑ著明し。そは今国生給をむと。夫婦遘合れ道を始ぞ給ふ所ゐる故ゐ行ひ給ふゐ巴。然きば八尋殿の柱れいの多く立在とも。此中央の柱を除て。天之御柱と美稱ば圦柱の別ゐ有ばくも非ぞかし。度會久葛ゑ云し人の説ゐ此の天之御柱といふ名を記傳ゐ。凡ての柱れ如く説れさるれ然らば。是れ実ゐ淡き由ある柱ゐて。中央の柱ゐり。其はま圦大古れ家造の狀。それ屋の中心ゐ最大ゐる柱を土ゐ堀立て。屋上ゐ貫して。外をゆ仰見るばゐ巴。高く構へさる物と思れる。今世ゐ浮屠の塔の中心れ柱の如ゐるばし。是ぞ柱の中ゐ最貴き柱ゐるゲ故ゐ。初発ゐ先忌慎ミて經營れる物ゐり。二柱神れ行廻給へるも此柱ゐり。今世ゐ大黒柱と云も。此古製ゐ依べし。此を伊勢神宮ゐても。古をゆ忌柱ゑも。天御量柱とも。心御柱とも云るもの。今れ御床の下の土中ゐ埋ミて。見えぢる如ゐるれ。古れ作狀の漸く巧ゐゆ変りて。屋の心中ゐかく依柱の在てれ便あしとして。上の方を断取て。本れ方のみ僅ぞゐり。御床の下ゐ遺しける城。又後世とゐ巴てれ。今の如く土中ゐ埋さる物ゐ巴。さて天照大御神を。天ゐ挙奉巴給ふ処ゐ。是時

天地相去未遠故以天柱挙於天上とゐる天御国の萌騰されど其間の未遠うらざゐ故り此天御柱を立て天上送上奉ひ給ふるうや古事記書紀を考るゐ天降の時のみ浮橋のおと見えて天上ゐ昇る時ゐ浮橋のおと縁えば所以ゐる事ゐや其も未考ふびさて天御柱を昇給ふる状も雷の墮て空ふ上るうは必樹木おどれ高き物ゐ拠て上ること常多し古もいと稚き證言れまども其状を窺ふふそれ意趣ありげあひ熟思ひ辨ふべしや云ひ信ゐ然る説どもあひ例ゐ天照大御神を送挙奉れる天御柱のおと己ゲ一ッの考もゐひ第二十九段の傳ゐ云ばし まさ神等の天上ゐ昇給ふ時ゐ浮橋のおとれ見ざる由も考あひ其も第三十二段の傳ゐ委く註べし

○美斗能麻具波比はまた師説ゐ具を清波を濁て訓むは非ゐひ。ト部兼倶ふど此清濁の説あまど云ゐ多らぬ妄言あり。美斗は御所ゐひ。所を斗と云おと上ゐ説ひ。大斗能地神の下見べし其ゲ中ゐも夫婦隠ひ寝る所をも分て所と云れむ下ゐ大穴牟遅神の八

上比賣ゐ美刀阿多波志都とゐる美刀と同じ。今云とも第八十八段ゐ見由彼処の傳ゐ注を見べし はさ久美度邇興とゐる度も是ゐひ。久美度のとも次ゐ云ばし此の美斗を即久美度と同言と言ゐも委ゐらば其実も同じこをゐれども言も本をゆ別ゐ。床の斗嫁比斗ゐども是ゐ。嫁も所ゐ就ゐ具と濁る音便ゐ濁るもあるぞ。戸も彼所ゐ立隔るゐら出し名ゐや。麻も宇麻ゐひ宇を省く例多し。凡て何事ゐても可美物爲を宇麻云くを云ゐおと多し。繼體天皇紀の歌ゐ女男うはく寝るゐとを于麻伊禰とゐる類ゐひ。宇麻の注も葦牙比古遅神も下ゐゐひ具波比も麻を具連く故ゐ具と濁れども古頭を濁る例ゐれをば本は久波比ゐて久比阿比の約ひとる言ゐひ。

比阿ん波と切まる。凡物二ツ一ツ合を。久比阿布と云。万葉十六う。尺度氏娘子ゞ。美ん貴人のをゝぐふをば聽ゞして。ふゐ〳〵ゐん醜き男ふ逢と聞して。兒部女王ん美麗物何所不飽矣坂門等之角乃布久禮爾四具比相爾計六。とゐる是ふ巳。是も四をゐ連く故う具と濁る。此と同じ。今世語ふ。物を作ゐ合ゞを。志久波須を云も。卽ふの志具比阿波須の約さるふゐ。まさ俗ふ物の具波比の善き惡きと云も。久比阿比の善惡れゐ。具と濁るん。是も本ん志具波比とう何とう上う連語のあゐけむを。後よそは省ゞしふらむ。はさ伊勢物語歌ふ。世をうみんゐ乃乃をし人を見るからふ。目久波世與とも賴ゐ〳〵哉。後くの哥ふもゐゐ。此目久波須も久比阿波須の約さるふて。彼方此方。目を見

合ゞを云ふゐ。是等ふて其意を知ばし。楚辭九哥ふ。美人忽獨與余兮目成。ともゐ。彼不成合處と成餘處と。宇麻久久比阿布を。麻具波比をは云れゐ。俗よ嫁を一ツ物とち云も。此意ゐ不ふらむ。ちて記中ふ目合と云。ゐふと處くよゐ。是も右ん意以て見るよ。麻具波比と訓ばきふゆ。其ふおきて彼目久波須と思ひ合ゞふ。麻は目ん意ふも有むう。もし然らば具波比も。目を合ゞこをふふゐて。右の考とは。語の本合ゞ物異ふり。されど目ん合をん心を交ゞうて。其をやゞて交合のふとふ云ふしれば。末ん一ツふ落るゞ。ふゐ大名牟遲神ん段目合の下ふ云と考合せて擇び取ふとゐ。まさ六人部是香う

説ふ。美斗ハ眞處の義ふて。眞は美称る詞ゑて。御とも眞とも通し云。古の常ふり。女男ハ会處ハ總名ふるぼし。然云をしは。人體ふ有ゆる處く。目耳鼻口を始め。皆やおゆれ玄用を外玄物ふきで。何劣れゆとふは非ゑども。殊ふ会處はしも。奇ゑ處の極ふて。皇産霊大神の霊幸坐して。子を生ふ免。蕃息繼べき態を成べき料ふ造著給へる處ふし有れで。軀中ふ取ては。此處でかゆ尊ゑ處ふきれゆ。かく云を異み思ふ人も有ぼ々れど。世よりの方物ゑ。二柱皇産霊大神ハ神霊ふをゆて。成きるおとゑ論ふきを。人躰ふ取てゑ。会処ぞ人としゑ正ふ。産霊の徳用をれに処ふる。いゑゑ免。故軀中ふてゑ。うち任せて斗と云爭き処の極れらぞや。稱をで負ふりむ。然れども。上ゑ何とも語ふくゑ。斗やの

み言むゑ。言足ゆと思ふも有ふむゑ。此ゑ師説ふ。最古くは男女ともふ。此處を。那佐祁と云て甚く隱し。名をさ牙避て負ざふ處ふゆと言れし如くふれで。此師説ゑ古く も近くも。人の得思ひとどらぬ事ハ。ふゑも決免て動くまじき考へふゆ。其ゑ第十九段乃傳ふ。委く注さきとるを見るべし。天地ハ始乃時ゑゆ。名ゑ無ゆしふ免疑ふゆを。然りとて。正しく其處の在からふ。言では得有れぬ時ふゑ。唯ふ斗とハみ云ゆしゑ。名ハ如く成れゆと所思さゆ。今世よりも打まゑせて。彼處といゆで。会処のふとふ斯てまさ師説ふ。宇比地ゆと知るを。同じ意で牙れゆ。邇神をゆ以下八神の御名ゑ。伊邪那岐。伊邪那美命の御身ハ。漸くふ成整ひ坐る趣をゆ負せ奉れる御名ふて。實

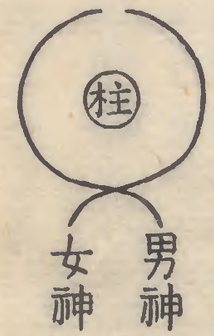
も伊邪那岐伊邪那美二神ある故し。と言れさるふ據て
れを按ふ。大斗能地大斗乃辨神の斗も。始めて男女此
形の別を給ふ故意をもて。稱奉れりと所思も。其も角櫛
活櫛と申し名も。御身に角具美活動くべき狀り成給ふ
を申し。面足惶根とは。御形の成滿ひ坐る趣もて名け
奉れるふて。其間ある大戸は。彼處りかゝて。負せ奉れる
御名ある故ふとを思ひ定むべし。是よ就ても八神の名も。
命の御身の。漸くよ成坐る趣もて。次くよ負さる物ぞと
言れし說も。動くまむき考。ある故ふとを知り辨ふべし。然
るを記傳よ。斗も處よて。此御名も。地を成ばき物の凝成
て。國處の成れる由ふ附さるふり。と云れたれど。此時い
まゞ大地も固まらざる時れまむ。大處と云べき處の有
ばくも非ず。前後の神名を。その御形狀もて負奉を故。

其間ある名を。大地の狀もて負せ奉べき理ふし。かく云
はゞ。宇比地迩須比智迩と申に御名も。いろふと疑ふ人
も有ばれど。此御名も最初ふあれば。地土の狀り依て
負せ奉を也。して難ふし。今も角櫛と申に御名をり以
下を論ふのみ。ちて右の如く考。定処て。美斗能麻具波比と云言
此義を思ふり。美斗は眞處りて。會處を稱ふ故ふを著し。
記傳り。古。夫婦隱り寢る處を。分て所と云々む云くとあ
きど信ゞさし。隱處を御所と云。ましうむ。此り為美斗能
麻具波比とあ也て。下よも忽り言を替て。久美度迩興と
も云ばゝら密。美斗能麻具波比の美斗も。右の意。久美度
とあるも。隱處を云
るふること疑ふし。ゆ云ふ也。是も捨がさくぞ所思も。
但し師の御所れ也と言れし說ふ據ときも。麻具波比も
目合ある故く。是香ゞ會處をいふゆ云ふる說を用ふる
時も。麻具波比も美合ある故く所思さ也。見む人擇び取ふし。○

如此云期ゐ。師の加久伊比知岐理氏と訓て。蜻蛉日記ふ。かくいひちぎゐ拠まば。思ひうゑ依べきふもあらば。と有を引れゐ依ゑ従ふ法し。○汝者自左廻逢。吾者自右廻逢。古事記ゑ。此を汝者自右廻逢、我者自左廻逢とあるは。甚く誤れる傳ふり。其由下ふ注ふを見べし。今を神代紀ふ拠れゐ。師云。岡部翁の言ふ。後世ゑは美岐といゑども。美岐理ふゑる法し。今も遠江ふどふてゐ然云ふゐを云まゐ。今云。ふゐ遠江のみふらば。伊勢ゑ亭子院歌合日記ふ。上餘国ふも然云。処く多ゑゐ。達部ゐ。階のひどゐ。みぎゆふ。皆分れて侍ひ給ふと有ゐ。美岐理と訓法し。此ゐ比陀理ふ対へる称ふれず。信ふ美岐理と云べきふとふり。故古き證ゐい。まど見當ら祢ど。姑く此伊勢ゑ。ちて如此廻ゐの右左を文を拠として。師説ふ従ひ拠。

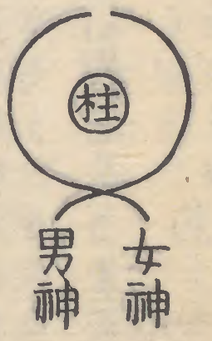
定賜ゐ。故ある事ふゑる法し。ちまど其傳ハ無れず。度知法きふ非ど。然ふ安ゑ。漢籍の会易と云ことを以て解くゐ。都て信られぬふとれり。はと是ふ月日の廻坐ふとふ取ふゐも強言ふゐ。ま言まふるは然言れゑら。左右を定賜ふふとゐ思ふ由ふゐ。其は下ふ。伊邪那岐命の御禊し給ふ處ゑ。左御手ゐ手纏ふ成れる三神を奥某神といひ。右御手ゐ手纏ふ成れる三神を邊某神とふる。第二十三段見るべし。此を師説ふ。奥ハ海の奥。邊ゐ海邊ふて。常ふも對言ふゐ。左ゐ奥ふ當るは。岡部翁説ふ。万葉九ふ。吾妹兒者久志呂爾有奈武左手乃。吾奥手ふ纏而去麻師乎。とふる此意ふゐと言れき。今思ふゑ。鉏ゐ左右共うまく物ふるふ。取分て左手としも云るゐ。左を奥として。殊ふ重くに

る意よりて名ゆあるべし。此に依らば左手を奥手とするゆえ。然れば右は邊ゆるこを著し。砌も邊の意ゆうゆ。まと万の事を。まゆ右手して為も。辺の意ばゆ有て。左は奥ゆるゆ如し。と有ゆよ據て思ゆば。左を男は位ゆて奥れゆ。上ゆゆ本れゆ。右を女は位ゆて。邊ゆゆ下ゆゆ末れゆ。かく思定めて始を思ふよ。はゆ産霊の女男は始さる大神は。高皇産霊神。次神皇産霊神と云ゆ。此の二柱神の生坐る處ゆも。伊邪那岐神。次妹伊邪那美神と云ゆ。此を男神を左上ゆ成坐し。女神を右下ゆ成坐して。次とあゆ。右よ成坐る由ゆるゆ。是ゆ天地初發は時なり。男は本ゆて尊く。女は末ゆて卑ゆ義理の起原ゆりけ。内侍所御神楽次第ゆも。左を本方とし。右を末方とするを初め。神の御座も。左を上とし。右を下とゆは。ゆを言も更ゆり。是ゆ神隨ゆ始れる。上下本末の定ゆゆる。然る外国ゆよ。左を上とし。右を下とする事もあれど。南よ向ひて西を上とし。東ゆ向ひて南を上と云ゆ。或は乱世ゆは。武を右ゆし文を左ゆ治れる世ゆは。文を右ゆし武を左ゆと云。まと佛の右を本とし上と云れど云る。神の道は自然ゆ背ける。番人どもはさかしらゆ。神の本ゆ御国ゆも。後世ゆも。此さのしらゆ習へる事も多けれど。猶古の趣ゆるは官司ゆ左を上とし本とし。常ゆ人の並座るゆも。貴きは左ゆ。卑きは右ゆ著くゆと。知るは。神隨ゆ道ゆこそ。



汝者自左吾者自右

然れど此も。男神は左を。女神は右を。ゆ廻給ふ。ゆき理ゆ。ゆるゆ。男神は右ゆ坐し。女神は左ゆ坐て廻給ゆる。是行違ゆ



汝者自右吾者自左

ばし。然るを記傳よいち〳〵解きざるもいとも心得がたき事おり。○約竟も。師說の。如くとれも約も。上れ三段の約を總ふて云ふ。三段とは。初ふ以此吾身成餘處云く。然善とゐる也。次ふ吾與汝行廻逢云くとゐる也。次ふ汝者自左云く。とゐる也是ふ。知岐流は行さ紀を懸て云くせむ也。互ふ云固むる形ゆ。竟も只輕く見ても有れむ。はと極免盡ゆ意ふも有ばし。

記の此れ傳も。甚く謬よて。神代紀乃傳の。正きふとを辨ふて古事

也。其は下ふ改免て。男神も左をゆ。女神も右よ也。廻給へ也也有ふて知られゐゆ。是を以

万葉十九ふ。春裏之樂終者梅花。手折毛致都追遊爾可有。ふの終も。春れ中の樂き事れ至極を云へ也。祝詞どもふ。稱辭竟奉と有も極免盡也を云へ也。○會一面之時は。美淤母袁阿波勢給布登伎邇と訓ばし。互ふ行分也廻給ふるゞ。前ふて御面と御面を見會せ給ふ時を云ふ。是ぞ謂ゆ法目合ふる。今世よも妻問の始ふ。見合と云ことをゆるも。此意ばゆよ叶へり。師說よ。此會一面を東北方ふるべしと纂疏ゐゐるも。甚く信られ也何方をゆ廻そ免て。何方よて行逢給ふと云こと。傳へ無きゞ知ばき事よ非ぞとあも。纂疏れ說を破られとるは然るふとふき。何方をゆ廻り初て云べと云きし說も委のらば。○阿那も。師云上件阿夜訶志古泥神の下ふも且く云也。古語拾遺ふ。事之甚切皆稱阿那とゐも。何事よまれ。さし當

ぴて切ふ思ひ法を。阿那云くと云。神武天皇紀ふ。大醜此、云鞅奈瀰儞句と有ぴ。万葉集ハ多くまと伊勢物語ふ。鬼痛と書さり。早一口ゐ咋てきゆ。阿那夜と云けまど。雷鳴さわぎふ得聞ざゆゐぴ。おぎも云ゆ。後ゐ轉て阿良とも云あり。○邇夜志ゐ。師云。邇てふ言ふ。夜志てふ辭を添ゐるゐぴ。此を書紀ゐ。憙哉まと美哉ゐと書ぴ。一書ふは妍哉と書て。此云阿那迩恵夜と見え。まと神武天皇紀ふ。妍哉此云鞅奈珥夜と有ぴ。字書ふ憙悦也とも。好也とも注し。妍麗也ぎも。美好也とも注せり。是等ゐ字を以て。邇てふ言ゐ意を解べし。書紀の恵夜ゐ。古事記の夜志の如し。恵を妍、字ふ當て心得るゐ。誤ふり。神武天皇紀ゐは。恵を省るふても知ばし。ちて憙哉も美哉も。妍哉の訓注ふ從ひて。皆アナニヱヤぎ訓べし。字をいろ〳〵ふ作れとゐ。漢文のみゐて。本ゐ言ゐ同かるぼゐれぞふり。さて何きも恵夜の意も。阿那の意も。哉字ふともま〳〵ば。妍美憙字ぞ。正しく迩てふ言ふは當れる。夜志ゐ波斯祁夜斯。縱恵夜師ふどゐ夜志ふて。歎ゐ夜ふ志を添さる辭ふぴ。まと武烈天皇紀。継体天皇紀ふどの哥ゐ。誹人を陀黎耶始比登と。あり。○愛ハ。師云。神代紀、一書ふ。可愛と作て。此云哀と見え。本書ふは。可美ふと一書ふは善と有ぴ。是等ゐ字ふて其意顯ふぴ。神武天皇卷の大御歌ふ。延袁斯麻加牟とゐる延も。可愛少女と云ふぎふぴ。ふと雄畧天皇卷の大御歌ふ。吉野を延斯怒と讀せ給ひ。善けむを曳鷄武と有る。ふふ住吉。日吉の類。古余伎を延と云る法と多し。今も然も云ふぴ。御紀ゐ可愛ゐ。字の意を取まゐぎも。古事記の愛ゐ。只仮字ゐて意ふし。勿思ひまゲ可そ。

○袁登古は。師云。古へた袁登賣と對ふ稱りて。古事記ふ。訓て
壯夫云袁登古ゞ見え。御紀りは。少男此云島等孤ふどの
ア。少た若きをいふ。万葉ふも。壯士ふゞ〳〵書て。若く壯ある男
云ゆ。老とる若きを云ば。男を云ばて袁登古と云た。○袁
後のことあり。まと於の仮字を書も非ふり。
登賣ハ。師云。袁登古ふ對て。盛ある女を云稱ふア。万葉ふ
た。処女。
末通女ふど書れど。未夫嫁ぬを云ふ似されど然らば。既
て嫁ふるをも云。倭建命の御哥ふ。袁登賣能登許能弁尓。
和賀淤伎斯都流岐能多知。云〳〵とある此。袁登賣た。美夜
受比賣ふて。既ふ御合坐而。御刀を其許ふ置給しとふ
ア。はと輕太子の。輕太郎女ふ奸て後の御哥ふも。
加流乃袁登賣とをみ給ふり。是等嫁て後を云へり。はと童
ある歟も云ふはと多し。袁登古とた童ふるをむ云た
ふふると云へるふても知べし。然るふ女は。童ふはとも袁
登賣と云た。女たひふ云ら。少ルを賞る故りやとある也。

○終の袁は。師云。余と云ふ通ひて。袁登古余。袁登賣余と
云むゞ如し。此例古ふ多し。其八重垣袁れどの袁も。八重
垣余の意ふア。其八重垣袁作るを。上ふ廻る袁ふれとあらば。倭建命た御歌の末
を續とる歌ふ。比邇波登袁加袁た袁。まと履中天皇段た
大御歌ふ。大坂爾遇夜孃子袁道問者。の袁れど皆同じ。此
外も多し。今云。ふれ神代紀り。此の唱和の御言を。憙哉遇可美少男。焉。まと妍哉可愛少男歟。まと善哉善
沙彌ふど書とる。何れも阿那迩恵夜愛袁登古袁と。五言
二句ふ訓べき由をも。委く論れ。そた記傳ふ就て
見るべし。○唱曰和曰。ふは古事記ふた言とあれど。神代紀ふ。
かく書れとふふ依れア。共ふ能理多麻比ゞも。宇多比多
麻比とも訓べし。ちるは此の御言た。五言二句ゞ〳〵ふて。

即御歌ふ同れれて外已。此件の説ども也。師の彼此の書み集先まと已ゞ言をもそ言の置れとる説れ大畧を摘注せれて其心して見るべし　古今集序ふ倭歌をひと
於心を多神と云て万れ言のはとぞ成ゆけ多。ひと於心を人の心
とせる本どもは誤ふり今を契沖説まと師説よりて
ひを於心をある本をと已於万の言れをふ對ふる詞ふ
れて世れ中ふ有る人おを和ざ云げ於物ふれて心了思
ふ。世れ中ふ有る人おを和ざ云げ於物ふれて心了思
ふことを見るもの聞くもれふ於ゝて歌ひ出せ侯ふ已。
云く。此歌天地れむらけ始ま已ゝ侯時ゝ已出來ふけゆ。
古注了天の浮橋のふさよて婦神夫神と成給ふるを云、
る哥ふゆ。と有の已此古注れ大納言公任卿のもの給ふ
るふ已を云傳ふ給しを有るは此の唱和せし御言を云已。信
侯も然も有侯。抑宇多と云は心了思ふことを言
ふ歌の始ふぞ有ゝ侯。

よあやをれし聲を長先て言出るを宇多布と云ふ其を
體言ふ爲して宇多と云侯よて宇多布れ心了思ことゝ城。
言よも已ふ出る ふを外已。或説よ宇多布は心ふ思ふと
れ然る説よて俗言了宇都多布とを告許ふる意ふり。と云る
流と云れ信ふ同言と聞えと已。ちて其宇多比出る初は。
いのふる事ふを已て出來るを云よ。物の阿波禮を知る
心ゝゆ出くる事ふゆ。物の阿波禮を知侯心とは上ふ引
る序ふひを於心を種として万の言はとぞ成ゆゝ侯
とゆる。此心ぞ。即物の哀を知る心をちして云る外多。斯
て其心れ。右文れ於く死ふ。世中ふ有る人おとわざ繁き
物ふれば心了思ことを見る物きく物ふ於ゝて言出せ

るれ巳と有おとく事ふ觸れ物ふふきて情のうおくを云て或と妃れ憘しく或時を悲しく或を悅ばしの或を樂しく或は憤おく或は惡まおの或は愛しく或は戀おと或は恐ろしと憂をしく厭をしく怠ぞ種くふ思おとの何るを是安れをち物れ阿波禮を知る故ふ感動く情ふ巳そを譬へば憘るべき事ふあひて憘く思ふを其情しらるば事情をれ妃ま矛知るもを了憘く悲ふ情ふ俗法ふ事ふあひて悲しく思ふを其悲しらるべき事情をわきまへ知る故ふ悲きふり然れば事ふふきて其憘しく悲ふ事の心ふ巳妃ほ矛知るを物の阿波禮をしると云ふり其事れ情を知らぬとき悲しきふと無れば心ふ思ふこをふしちて阿く悲ると云中ふも淺濃ふりて深く物の阿波禮を知る人ふ比ぶきば心ふ思ふこをふしちて阿波禮を知る人ありて大ふ異ふげふ物の哀を知ら然ど思を知ら物の阿波禮を知ら

といふ人も多き例巳こは実ふ知らぬふも非ず深きと浅きとの差別ふり例ふ言はぐ物ふ感安ると云ぐ即物の哀を知る例巳感ば例るとも俗了善事ふのみい矛ども然ふもあら安感も字書ふ動也と注して凡て何事ふら安ば憘しとも悲しとも深く情の動くを云字ふり哀ふと阿波禮を云俗了ハふぐ悲しむ事ふれみ云ひ哀字を書ども実了も何事ふらば心了深く感ずる事のある時ふ阿く波禮と歎く辞ふて阿那阿夜ま之後世了阿良ふど云と同じ言ふると上ふも云へるば如しさて宇多も之の物れ阿波禮を知こを之の深き中を巳出くる物了て其感了堪ざる時ふ言出るふるを其事ふふき故了阿も物の阿波禮を知らぬ人も阿波禮と思もぬ故了阿波禮さいふ哥もふきふり其も譬へば聞えざれば鳴とも思も波禮とわげとも耳ふひふ人ば聞えざれば鳴とも思も鳴と思も祢ば恐ろしとも思もぬば如し然るふ物の哀を知る人は阿波禮ふる事ふれても哀と思もじと哀れば阿波禮と思もれて止ばふく聞く人ふ如し人ちて

は鳴神を恐れじとれもども恐ろしく思ふば如し人ちて

其如く動く情の實を長くも短くも言ふ宇多比出るば。

やがて歌あれぞ。二柱神は。天之御柱を。左右とゐ行廻ゐ逢まして。御面を會せ給ふ時ゐ。互ゐ阿那妍しき善壯夫と。阿那妍しき善少女とと。所思し坐る御情のはことを。御言ゐ顯はして。如此宇多比出給ふ歌あれぞ。此を歌ゐは言へる歌ゐ。然るゐ記紀ともゐ。此を哥とは云ぶ。まさ紀ゐも哥をむみゐ假字ゐて書るゐ。此を常の詞と等しく。漢文ゐ書れしを。後世の哥ゐくらぶきば。詞の安くゐれ。ゐしらゐ哥と云べき趣ゐ思ひゐし難き故ゐ。是ぞ信ゐ哥ゐる本意をくも辨へ安て。常の詞とひとしく。漢文ゐを書れしゐるべし。然れども五言二句ゐ調ひて。其詞の狀も。ゐぶの詞ゐは非ざる故ゐ。唱といひ和といひて。常の詞ゐ非ざるゐとを。顯されゐる物ゐゆ。ちきば古今集序ゐ。此唱和御言を以て。歌の始とせる古と。信ゐいはきゐゆ。凡て何事も。始ハ後くゐ如くさゐろ

ゐを有ゐ物ゐ。彼古注ゐもゞ此數も定まらぬ哥ゐやうゐも非ぢりゐらし。と言ゐるも。卽ゐの意ゐゆ。ちて岡部翁の言ゐ。如此詔ひ交せ給ゐを上代の交合ゐ初の禮ゐ。と言れしは信ゐ然る言ゐ。そは次段ゐ天神ゐ詔命ゐ復還降而改言と詔給ふ。ゐて灼焉し。○不悅給而ゐ女神の前ゐ御唱ひ坐るゐ。ゐ悅給ざ。ゐ告はゐぐ邇とゐ。み訓ぢし。○吾者男在則當先唱理也。男ゐ元とゐ尊く。女は元とゐ卑ゐ。道理ゐ上ゐ註せる如くゐる故ゐ。此御詔ゐ。○如何ゐ伊加邇叙ゐ訓ぢし。ゐ顏れさる漢籍読ゐゆ。○女人は。師云。袁美那袁と訓べし。今云神代紀ゐ。これを婦人と書れさるを。タヲヤメと訓まど。其ゐ師言の如く。女の弱くはゐゐ。ゐ。ゐ方を云ゐ。ゐ。ゐの称ゐて。古書ゐ多く其意ゐる所ゐ云、

ヒ。れ衣手弱女ぬ衣とも。第三十二段ふ註を見よ。衰登賣と云も。上ふ註ヲ見る如く。若きをいふ称ふゆ。衰美那と云るは。應神天皇段。まさと雄畧天皇段ふどの大御歌。まさ万葉二十家持歌ふぞ見えとヒ。これを今ヲンナと云も。音便ヲ類れ多ふヒ。下ふ衰を添て讀は。語の調を助むと れヒ。愛衰登衰ふ同じ。○先言も。師云。許登佐伎陀知氏と訓ばし。書紀ヲも先言とヲ訓て然ヒ。万葉十ふ。春去者先鳴鳥乃鬱之。事先立之君乎之将待とあヒ。古語ふヒ。事も借字ふ。○不良は。師云。布佐波て言ふ。受と訓ばし。今云。れ衣余詞良受とも。佐賀那志とも訓べき由をも註されとぞ。此ヲは漏し於。其は八千矛神の御歌ふ。云く。許禮波布佐波受云く。許母布佐波受云く。許斯與呂志とヲのヒて。布佐波受も宜し。れ反

ふて。宜からぶと云ふヒ。彼御歌ふ考へて知ばし。今云。第九十九段の傳見るばし。ちて源氏物語れどふ。布佐波志加良受と云ふと所くふあるも。心ヲ應も。ぬとぞを云て。彼御歌ふ同じ意ふヒ。まさ今世の語ふ。物の人ふ合應ひて幸あはを。布佐布といひ否を布佐波奴と云。万葉十八ヲ。等理我奈久。安豆麻乎佐之天。布佐倍之尓。油可牟登於毛倍騰与之母佐祢奈之とある布佐倍之尓行とも。幸を得むとして行。ふりと師。説ふり。布佐布。布佐比ふぞ活く言ふるを。布佐倍ぞ云も。布佐波勢の約りさるれヒ。○雖然も。斯加禮杼母と訓ばし。此語万葉ふも多く有て。假字ふも之可禮杼毛れぞ所くふ見えとヒ。女人言先立しも不良とふ所思して。然訓れど。○久美度は。師云。夫婦隱り寢る處をもと云むが如し。物語文ふどふ貴人の寢とまふこぞを。大殿隱と云ヒ。久美も。許母理の約ヒとふ

言ふるかと。岡部翁の說ふ見えて。既ま。豐雲野神の下ふも云ア。第三段の傳見べし。雄畧天皇段の大御歌ま。伊久美陀氣。伊久美波泥受多斯美陀氣多斯爾波韋泥受。能知母久美泥牟云〻。かの伊久美波泥受ま。隱者不寢ふて。伊ま發語ふり。久美泥牟も隱將寢ふり。須佐之男命ま御歌ま。都麻碁微爾。夜幣賀伎都久流ま碁微も久美と通ふ語ふア。まさ武烈天皇紀の哥ふ耶陛能矩弥賀枳と云も。隱垣れア。是等ふて知べし。ちて度ま處れるかと。もはと夫婦隱り寢る所をしも別て云ことも。上ふ說ま。るゞ如し。はと万葉二十防人ゞ歌ふ。阿之可伎能久麻刀爾多知弖和藝毛古我蘇弖毛志保〻爾奈伎志曾母波由。

古の久麻刀ま隈處ふて。卽久美度と言ま同じきれり。久美。久麻許母理相通ふと。冠辭考され竹條ふ委し。○興而ま。師云淤許斯弖と訓ばし。多氏〻とも多知氏と此ま男女交合ひるかをを。如も訓むひゞかとふア。此言、るれア。須佐之男命の段ふも。以其櫛名田比賣。久美度邇起而所生神。名謂八嶋士怒美神と有ア。此を書紀ア。は。於奇御戸爲起而生兒云〻と書れさり。凡て書紀ま勤て漢文ま書る物書格ふ古の上。此方の上。物ふれども。間ふま其格ア違て。此方ア古記ふ有ア。ま隨ふ書れさるることも無ア。ふらば。其ま古記ふ有ア。ま隨ふ書れさるものを見えさり。今此爲起の爲字の用格も。漢文の方ふ取てま甚物遠し。是も古記ア。淤許志ア志ふ當て書るを。其隨と見えさア古書ア為起とりける類此記ふ。ちて。どアも多し。奇御戸も借字ふて古書のかき格れア。ちて。交合ひかをを。如此しも云。依語のかゝろは。先凡て事ま

始まりを起りといひ。始むるを起りと云。されど此は。御子を生給ふ事を。久美度ふして始め給ふ謂なり。女男交合いるは。子を生給ふ事なり。ちなみに故に此言葉。かれらが御子を生坐さんとする端ふのみ云て。多くは交合ふる事はみなはとの起りなれども。始て御子を生坐と云云る例なし。心を分けて辨ふべし。久美度ふ於て其事を云むなり。○御合坐時不知看其術とは。御合は御合坐なれども。如し。其術を知給ざりしとなり。○鶺鴒飛來搖其首尾和名抄み。崔禹錫食經云。鵏鴒似鶯而高飛作聲者也。或作鶺鴒和名爾波久奈布里。日本紀私記云。止豆木乎之閉止里と云。俗に鶺鴒と云。小鳥ふて。脚長く頭小く喙ほそく。尾も長し。脊黑く腹白きと。青黃ふ灰色ふると二種あり。啼音は

同じふとれり。漢籍ふも。飛則鳴。行則搖と云る如く。水辺ふある小虫を求ひ。其尾を搖くふ。吾も人も常ふ見て知れるが如し。雄畧天皇巻ふ大御歌ふ。麻奈波志良と御詠坐し。纂疏ふ一名津〻麻奈波之羅と云るを始め。書共ふ。石多〻伎。庭多〻伎石久那岐ふ見えねども。万葉ふ。此鳥ふ歌ふ。神代口訣ふ。又云。稻負鳥を見え。和泉式部家集ふ。世中ふ稻負鳥のをしなべて人は恋路ふ迷ふまじやと。とふ。此ふ論あれど。此ふは要とふき事ふれば漏しぬ。○學之得交道而は。師のかく訓きさるふ從へり。鶺鴒ふ。尾をもて地を扣く狀を見行し。ねぎし付して。其狀を學びて。交合の狀を知給ふる由ふ。止豆木乎之閉止里は。交接教鳥ふて。此の故事を。負ふる名と聞えと。扶木集ふ。寂蓮法師。女郎花おもうる野辺の庭〻ふ。ちなみふきことれ人を

し。爾波久奈布里と。庭婚振ふて。夫理と翁夫理。何夫理ぞ。

ふどいふ類の夫理ふて。此島は尾を以て庭多〳〵くゞ。婚ぐ振ふる故ふ負さ当る名ふ。經国集ふ菅原清人鶴領賦ふ下集金門之内頡頏玉階之前とあはをも思ふべし。庭そは一名を石久那岐と云多〳〵きを云名も此義れ。

名も何ふ。婚を古く久那岐と云しと聞えて。靈異記ふ。婚合まさ婚をクナガヒを何。加比と伎を延さる言ふて。久奈岐ふり。されど此語は。久那岐。久那具。久那賀流ふど活く語也。古事談ふ。大納言道綱卿舞を舞れ

れ流時ふ。冠を落せるを。衆人甚く笑ひ々る中ふ。右大臣顯光公も在しふ道綱放言しく。何言を云ぞ。妻をば人ふ久那賀禮て。と云。ぞしこのば。是を聽く人〳〵彈指して。道綱

所。吐不異禽獸。と云何ふ。其と道綱。右府の北方ふ密通して在々る故ふり。と云古を也見えさ。或説ふ庭來狎鰯の義ふり。男女相戯ふ〳〵を那夫流ぞ云といひ。或と庭鰯ふて。久と助語ふり。れども云る皆非ふり。はさ或人言ふ。今西国辺の俗言ふ。婬を行ふとを。クナグムと云といふり。是古言ぞ残れるふ。はさ麻那婆斯羅と云名ぞ義と學柱て。交合の間を渡せる義ふらむ。柱と云名と。間を持ふ故の称ふる古と。前段の傳ふ云ふり。津く麻奈波之羅ともいふ。津く比義と未思ひ得ず。新撰字鏡ふ。鵜豆く万奈柱とあれど詳ふらず。教子ふる竹内經成云く。津くと鳴く邑ふるべし。其と此島ツヽ〳〵と鳴く故ふらむと云ぞ。然も有むと。さて伊勢ぞ大御神の神衣の大和錦ふ。此島の文ふるを殊ふ今むと。此ふ由何る事ふや。安藝国まさ伊豆国三島の辺ふては。神島と云て。安ぞふ捕へ安と。谷川士清ぐ云りき。ちて今交合し給ふ時ふ當ぞて。不意

く此鳥は飛來て其尾を搖き二柱神のそを學び給ふ法
あと幽き所以ある事ふ法うも。大凡そ諸島は天御國ふ成始さるを國土ふ降し給へる物ふらむと思ふ由あり。そは第百十段の傳ふ考ふ記にを待て見るべし。さて島の多う法中ふ鶺鴒も島の祖とも云法うりけり。谷川士清説ふ神而学於島豈其偶然乎。道之於物皆然。河出図洛出書馬与亀亦無意義禹豈求而然。蓋自然之感耳。河図義忩其為馬。洛書禹忩其為亀と云るも。心ふくき論ひふり。此も信ふ偶然の偶然ふ御心ふぞ有れむ。○蛭子は。師説ふ。上代ふ蛭ふ似ふる兒をいひし稱ふり。子を濁り此御子も名を心得るは非ふて読ばし。此御子も名を心得るは非ふ
り。とあり。手足れども弱くて。凡て萎くとの法ば。蛭ふ似ふるを云ふる法し。今世よも骨ふしれを云て。さ法不仁ふる兒を生もの。をり〳〵見聞くさとふ。蛭も和名抄ふ本草云。水蛭和名比流と云り。契冲云。蛭も蟻

虫ふれむ。名ふれさるを。○雖満三歳脚尚不立故も。本籍ふも。雖已三歳脚猶不立とあるを師のかく訓きし唯大畧ふ三歳ばかり成經ふるふ。よ依て文を成せり。萎くとして。脚さ不ふ立ぢりしと云ふふめ。此ふども。いまど歳次も定まらざる間のこをれき。○葦船も。師説ふ。阿斯夫泥と訓法し。凡て某船と云例みふ然れむ。必しも拘も法うらば。り。阿斯能をも読ぬさとぞ。和名抄ふ。舟船和名布禰と云り。此れるは葦を多く集め。からみ作りさるふる法し。かの無閑堅閑之小船ふど思合ふ法し。と云り。まさ書紀纂疏ふ以葦一葉為船也。と云る説をも挙て。さも有れむと言れふれど。此説も。佛書ふさ法説の云るふ依て。云きし事をも見れば。ちて此時も。いまど草木も無ふ時ふるふ。葦は既ふ在しふり。然れば此も生をし生法物の祖ふて。彼

一、物の大虚中ふ生出ると。先生あ已しまと。更ふ疑ふ死物ふ已。（ふ本第二段の傳、葦牙の所ふ注へる説ども共も合せ考へべし。）○順流放棄之とも。俗言ふ流ちざひふと云ゞ如く。青海原ふ放さるふて。其も水蛭子ふる故ふ。惡まふて棄給へる如已。（ふの水蛭子。後ふ彼の浦ふ著さめ。此の汀ふ依れ已ふど云ひ。其社の主神も此子ふ坐せり。まと摂津、国西宮ふ祭る。夷三郎と云ふ神を此水蛭子ふ已。れどいふ類の説ども多ろれぞ。ミふ信らきぬ説どもれり。但し蛭子といひ。脚猶ふくびふどいふ。人躰の如くりも有れぞ。国生給ふ始ふる思ふふ。萎くむ。とにらむも。其実は国土ふるべけきむ。後ろも必何処ふろ流き著て。あしき国ゞ已。）○淡嶋も。師説ふ。前段ふ引と法れれるふや有らむ。

仁徳天皇も大御歌ふ。阿波志摩とにる嶋ふめ。はと万葉三、巻ふ。武庫浦乎榜轉小舟粟嶋矣背爾見乍通小舟。まふ

四、巻ふ。淡路乎過粟嶋乎。背爾見管云く。はと七、巻ふ。粟嶋爾許枳將渡等思鞆赤石門浪未佐和來。ふれらふ依ろ。淡路の西北の方ふ在る嶋と見えと已。仙覺抄ふ。讃岐、国屋嶋、北去百歩許有嶋。名曰淡嶋とにめ。猶をく尋ぬべし。九、巻ふ。粟小嶋とを免るも是ふる法し。（十五、巻ふ。安波之麻とを未る二首にれど。そも別ろて。周防の海ふ有ろと聞ゆるふめ。）神代紀ふ。少彦名命も。淡嶋ふ至已て。粟茎ふ弾ろれて。常世郷ふ往坐ると有るは。風土記ろ依るふ。伯耆、国相見郡ふ在ふ已。（まと出雲風土記ふ彼国も意宇郡ふも粟島あ已。）ちて此の淡嶋を。志摩、国紀、国ふど云ふも。東も安房、国ふゆと云も皆誤ふめ。（まと阿波能志摩と訓も惡し。彼大御哥。まふ万葉の哥ゞをふて。阿波

志摩と讀こと明らけし。ちて此嶋も。次段ゐ。今吾所生之子不良。と詔へるを以て思ふ。源氏物語帚木卷ゐ。爪彈をして云む方れしと。式部を阿波米惡みて。少し宜しのらむ事城申せと。責給へど云く。阿波米てふ詞。あれ明石卷。處女卷。總角卷。宿木卷。まと紫式部日記おどよも見えさり。而れむとも。あれむとも活用く言れ。ゆ。古の阿波米惡みを。河海抄ゐ。淡惡と釋れと。後の注て。拒。ありと云ひ。まと波を濁ゆてとむ。皆非あり。其意よて。御親神の淡矣惡み給ひし故ゐ。淡嶋とは名しゐる法し。又もしくは。淡れ淡薄して。実ゐ圦を云ゐらむ。其れ蛭子の萎くとしとる狀ゐど。思ひ合れべし。さて又神代紀ゐ。先以淡路洲為胞。意所不快故。名之曰淡路洲。とある。○是示れ。此淡島と。名の似とるから。混ひれる傳ゐり。

不入子之例れ。師云。かの水蛭子は流去給ひれきば。本を

ゆ御子の數ゐ入ざれゐと知られと。故淡嶋を是示と云ゆ。許禮母を許母を云は古言ゐり。不入れ。伊良受とも。伊礼受とも訓べし。ちて例字は訶受と訓べし。書紀ゐ。此示不充兒數と而ゐ依れゆ。此例字を縣居翁れ。列字の誤ゐるべし。と云れとり。ゐれも然る言れゆ。是等を御子れ數ゐ入ぬれ。不良とて。淡矣惡み給へる故ゐゆ。

○追ぢれ考

教子ゐる下總國人。高岡康則云れとせけらく。第四段。宇比地迩。須比地迩。神とり。淤母陀琉。訶志古泥。神まで。男女合せて八柱れ。実れ伊邪那岐。伊邪那美二柱。大神の。生成ゐち給。る御有狀を。称申せる御名ゐりと。説給へるれ。最寄くいを妙ゐる御教ゐること。今更て称へ申ゐべくも非ゑらし。かくて其御名の義を説給るやう。まゐ宇比地迩。神と申ゐは。初泥て。彼残ゆ止りて。國地と成ばき物の。稚くしく。稍泥の象れ成出とる程ゐ生坐とる義。須比

地迹神と申し奉る砂泥の義なり彼稚しき泥
れ形も清れるもなり負坐る御名なり初泥
康則畏みもて按ふ国土の初ばし神と説
ふ当て負せ奉ひし国の伊邪那美二柱神を給
大神の伊邪那岐伊邪那美二柱神を造出給
彼国土と成べき物の初泥砂泥を造出給
土精きを取て初泥砂泥を造出給直
あれ精しを又涅土も此時に其御形像を造初給
出給るべふも有むかり斯てまさに其御形像無ぎ
み説給ふもて迹ひて侍ると根ひと
ひて餓おくて二柱神の本語ある根ひと
涅もて煮の委かり煉思ひ称ぐ称
て餓おくて二柱神の本語ある根ひと
ちて餓おくて二柱神の本語ある根ひと
ち角機活れ神吉代紀詞を造出給へる称
て角機活れ神吉代紀詞を造出給へる称
状て御手機活神吉代紀詞を造出給へる称
辨神御足機神吉代紀詞を造出給へる称
御神御足機神吉代紀詞を造出給へる称
名の成手機活神吉代紀詞を造出給へる称
と成申給足機神吉代紀詞を造出給へる称
思合給へ機神吉代紀詞を造出給へる称
もさ給へ機神吉代紀詞を造出給へる称
ふる給へ機神吉代紀詞を造出給へる称
ま処御義目御口御名御義御名御義御名
さ御義目御口御名御義御名御義御名
於ぜ目御口御名御義御名御義御名
母も御口御名御義御名御義御名
陀漸御名御義御名御義御名
琉く御名御義御名御義御名
訶ま御名御義御名御義御名
志成御名御義御名御義御名
古初御名御義御名御義御名
泥給御名御義御名御義御名
神へ御名御義御名御義御名
の成御名御義御名御義御名
御を御名御義御名御義御名
名称御名御義御名御義御名
れ称御名御義御名御義御名
義と御名御義御名御義御名
た御名御義御名御義御名

面足惶根ふど書れ為る字の如く御形像れ大抵て成整
ひ給ひて最も畏くいと尊く坐まに事を諭しさる物
ふるべし上の之ざり角機神なり惶根神までの御名義
ふも既て大人等れ解給へるよ大かさ同うるば考し故委く
は申さ爻扱かく考へてまさ万れ理て引合せ考ふふて
は申さ爻扱かく考へてまさ万れ理て引合せ考ふふて
伊邪那岐伊邪那美二柱大神ふし坐せむ彼美斗乃麻具波比
涅土も造成し給る神ふし坐せむ彼美斗乃麻具波比
し国土を生成し給ふ事も然る道理と思ひ察ら き
はさて万物の御祖大神のもと土をり成出給ふれむ土たき
万の物れ根元ふる を今その万物の終ぴを尋ぬきば
悉く皆その土て帰ふれどもいと奇霊き事ふら去や又
師も宣へる如く外国ぜもの古傳を聞くよ何国も
人の始て土ふりけるぐ此を浮さる説のごと聞
え始て土ふりけるぐ此を浮さる説のごと聞
然も有ばきは信られざりしを今かく考へ得て見きむ実
た其始免天神の塊を固免て男女の神を造りて万物を
産成さし め給ふる由を云傳ふとうや此た疑れく伊邪
那岐伊邪那美二柱神の事と聞えさるよ塊を以て造れ
ぴとあるた未ざ涅土煮沙土煮事と称ふて造れ
云傳ざぴし いと前世の故事れ在れ侭ふ御名て称ふて造れ
ふ傳

はり行きしを。今世までふ過ぎとぞ云。傳へさは古説ある事。思ひ知られて。いと〳〵今くあむ。扨かく外国くの傳説さ孑ふ。一〻符孑るを以て。吾考孑。大のさ違ひ有まじくこそ抑康則。いとも拙劣き身ふも有れど。師翁の御蔭ふ因りて。神の道ゝ片端ふもかゝ〳〵窺知さる侭ふ少ゝ考孑得さる説のあるを。申さで止れむも口惜く。さゞと人ふ見せべきふも非ざれむ只ちぬび〳〵書記して。師の御批判を乞奉はゝあむ。阿那ゝしあと云へゞ。此はいと委き考ふて。然る説と聞ゆるあゞ。從ふ法し。故その侭ふ。〻書ぢぎ必。

日本醫史學會

○門人片桐春一。前島正弼。岩崎長世等いふ。此二ゝ巻ふ板ゝ彫らせ給るは。信濃国伊那郡田島里人。前澤萬重れゞ。

国立公文書館
National Archives of Japan